Tsukuba Urban
Transportation Center

TUTC Library—18

平成8年10月

●座談会

これからのつくば
—長ぐつ時代の市民が語る—

21世紀つくばへの提言　シリーズ 4

Tsukuba Urban
Transportation Center

TUTC Library—18

平成8年10月

●座談会

これからのつくば
—長ぐつ時代の市民が語る—

21世紀つくばへの提言　シリーズ4

「これからのつくば ―長ぐつ時代の市民が語る―」座談会

花開孚雄

中根房子

豊島邦雄

座談会出席者

土肥博至

木原幸子

島　美佐子

生田美恵子

敬称略

記録集『長ぐつと星空』

筑波研究学園都市の生活を記録する会が昭和56年に刊行した文集で、新住民とそれを迎えた地元の人びとがみずからつづった体験記を集めた記録集です。そこには県庁の担当者、桜村の村長や学校の先生、交番のお巡りさん、郵便局長、住宅公団の人、小中学生を含む大勢の新旧住民の体験談が収められています。題名の『長ぐつと星空』は移住者たちの、長靴なしでは生活できなかったつらい体験と、東京では見ることのなかった美しい夜空の星を仰いだ忘れがたい思い出から、編集にたずさわった方々がつけたものですが、新住民の個々の体験がおのずと筑波研究学園都市の一時代を物語っていて、この時代を体験した人びとを「長ぐつと星空の世代」と呼ぶことができるような、傑出した題名となりました。(発行は正続とも筑波書林)

今回の座談会は、この本の編集、執筆にたずさわった方々により、開催しました。

「21世紀つくばへの提言」シリーズについて

日本は今、新しい世紀を間近かにして、高齢化、情報化、国際化、環境問題、地価問題等々、社会経済を基盤からくつがえす大きな転換期を迎えようとしている。

一方、つくばにおいては、研究学園都市建設事業が着工以来30数年をへて、公共交通機関の未整備等、多くの課題を残しながら、漸くその熟成段階に至った。また、常磐新線や圏央道の計画は実施に向けて次第に具体化し、その大規模沿線開発と併せ、つくばは更なる発展が期待されている。

今、このような状況を直視し、これからのつくばの都市建設のあり方について、その基本にたち返り、議論を広げ、かつ深めることは大いに意義あることと思う。

座談会
これからのつくば
―長ぐつ時代の市民が語る―

●

日　時：平成８年４月23日

●

場所：筑波第一ホテル

●

座談会出席者

司会・土肥　博至（筑波大学教授）
生田美恵子（『長ぐつと星空』編集委員）
木原　幸子（『長ぐつと星空』編集委員）
島　美佐子（『長ぐつと星空』編集委員）
豊島　邦雄（農業）
中根　房子（農業）
花開　孚雄（茨城県つくば人材情報センター人材コーディネーター・元つくば市総務部長）

あいうえお順　敬称略

浅　谷
（前理事長）

つくば都市交通センターの公益活動といたしまして、小冊子を編集配布して市民の方々のお役に立つよう努めているところですが、その一環の「21世紀つくばへの提言」シリーズとして、今日その4回目の座談会を企画いたしました。

昭和38年に研究学園都市の建設が政府によって決められてから、もう既に30数年になります。人口も当初の7万人台から、現在、茎崎を含めますと17万人に達しています。昭和47年に最初の公務員住宅の入居が始まったわけですが、当時国の研究機関の建設や移転に合わせて、つくばに移転してこられた方々や、従来から農村地帯としてのつくばに住んでいらした方々の、ご苦労や思いがけない出来事を「長ぐつと星空」と題した2冊の本にまとめられています。この収録等に参加された方の中から6人、司会をしていただく筑波大学の土肥先生を加えて7人の方々で座談会をしていただきたいと存じます。

本日、お話をいただきたいこととしましては、大きくはふたつございます。ひとつは、この20数年のつくばの変貌を、お住いのみなさんから改めてここで総括していただく、ということです。毎日の生活から、つくばの移り変わりについて一言、端的にご感想をいただきたいと思います。

次に、常磐新線とそれに伴う沿線開発によって、つくばは21世紀に向けて、また大きく変わろうとしています。今までのように国のプロジェクトに参加した、あるいは参加してしまった、ということと違って、今度は市民として「新しいつくば」にどう取り組んでいくかという“心構え”について、是非コメントをいただきたいと思

います。

今日は研究学園都市の当初から計画に参加され、その後、つくば市民でもいらっしゃる土肥先生に司会をお願いしたいと思います。それでは、土肥先生の進行でよろしくお願いいたします。

はじめに

土　肥　今日はお忙しいところ、ありがとうございます。座談会の趣旨は既にお話がございましたが、浅谷理事長が今言ったものよりは若干、これからの問題のほうに力点をおいて会話を進めさせていただきたいと思っております。幸か不幸か平均年齢のかなり高い座談会になりましたが、これはそれだけ長く住んできたということで、気持ちはみなさんお若いわけで。私のほうで特にどういう方向でまとめようか、ということはまったく考えておりません。ただ、例えば、あまり微に入り細をうがった昔話にいきそうになったら、ちょっと手綱を引かせていただく程度でお願いをしたいと思っております。よろしくお願いいたします。

私も今日のことがありまして、昔買わせていただいた本（「長ぐつと星空」）を引っ張り出したことは引っ張り出したんですけれど、なにせあまり時間がございませんで、著者の方のお名前を一通り確認したという程度のことしかしておりません。昭和47年、つくばにおいでになられた島さんや木原さんがその当時のことをかなりヴィヴィッドに書いておられると思うんですが、２冊目「続・長ぐつと星空」が出来てからもう既に10年以上経っております。この20数年

間といいましょうか、ほとんど一世代に近くこの街にお住まいになっていて、良い悪いという判断はなかなか難しいんですが、特にどういう面が大きく変わったか、意外に変わらないで昔の問題をそのまま今も引きずっているのは何か、というあたりから、ちょっとお話をいただこうかなというふうに思っております。

それから豊島さん、中根さんは、もともとこの土地にお住まいなわけですから、もっと長い時間軸の中でこのつくばをご覧になっておられるので、そういう立場から、見かけ上の問題というよりは人々の生活とか、その中の気持ちの問題としてどういうところが大きく変わったのか、どういう点がそうでもないのかというあたりを簡単に一言ずつ、最初にお伺いするというところから始めたいと思います。こういう時は大体、島さんを頼りにすればいいわけで、島さんの方からひとつ口火をお願いできればと思います。

窮乏時代があったことで新旧のネットワークができた

島　実はこちらにいる木原さんが大先輩の47年入居で、私が49年、生田さんは52年ですから。入居の順でいうと、木原さん、私、生田さんという順になります。

それで私の感想としては、当時、建設途上で開拓の地域でしたけれど、今は私に言わせれば「100％生活の環境は揃った」と言い切ってもいいと思っています。そのぐらい、その当時に不足していたもの、欲しいと思っていたものはもう与えられたし、出来上がったというふうに思っています。ただ、当時私が持っていた学園都市と

いうもののイメージがそのまま実現したかどうかということになると、「どうかな？」と思うこともあります。

今思うと、昔の窮乏時代があったので、私たち新しく入居したものたちに、非常に良い心と生活の上の友情と申しますか、ネットワークというものが出来たことと、それからまた、非常に今までの環境と違ったところに私たちが移住させていただいたおかげで、前にいらっしゃる豊島さんとか中根さんというような方とのご交際の結果、私たちが知り得なかったカントリー・ライフというか、農村というものの実態に触れることができて、これは私の生活を非常に豊かにしてくれたと思います。これは私だけでなく、今でも新しい住民の人たちが古い農村から得ている宝物というものは、非常に大きいと考えています。

それにしても、その当時、私たちと農村をつないだ扇の要にいたのが、花開さんのような行政の担当者で、私たちはその行政がなかったら、旧村の人とも交流が果たしてどの程度にできただろうかとも思いますし、また、行政の方で私たち新しく移住したものの要望というものを、非常によく理解していただいた結果、現在、大変良い生活が享受できたと思って感謝しております。人間の欲望には限りがありませんから、現在の住人は現在の時点でなんやかんやと不満は持っているように思いますけれども、私たちのように、もう20年間ここに住みつかせていただいたものにとっては、まあ一言でいえば、「あの頃を思えば今は天国よ」という感じでございましょうか。

女性のパワーが21世紀の夢をつくる

木　原　私は今、島さんがおっしゃったように47年でございますから、本当に砂漠の中に降り立ったような、そういう環境でございました。今、振り返って一番思いますのは、やはりその当座というのは、自分でものを選ぶということが全然できなかったわけです。要するに、「複数のもの」というのがなかったんですね。ほとんど「これしかない」という、そういう状況の中で、みんなと苦労しながら分かち合ってきたわけですけれども。今はそういう意味では、複数になり、たくさん選び取るものが、都市という形が概成されてきた中であるわけです。ただ、質の問題として「良質かどうか」ということを問われると、「えっ？」というような感じがしまして、そのあたりがこれから先、問題になるところかな、というふうに思うんです。どなたでしたか、「ここは人間が住むような場所じゃないんじゃないか」というふうにお書きになっていらっしゃいましたが、その後こういう本を読んでいただいて「女性のパワーがすばらしい」ということで「21世紀に向かって夢が持てる」というふうにおっしゃって下さったわけです。ただ、「われわれが今後どのように頑張っていくか」ということは、問題として残されているとは思いますけれど。

成長を続ける都市

生　田　今お話になられた木原さんや島さんが、長靴と、杖と、懐中電灯

が必要だった第一期の移転者とするならば、私は第二期目と言えるでしょうか。東大通りの歩道橋がまだできておりませんでしたので、住まいの竹園２丁目から竹園幼稚園まで、今なら10分位ですが、18年前は30分も40分もかかって遠回りして子供たちを送り迎えしたという時代でした。それで、「長ぐつと星空」の続編、２冊目のほうからかかわらせていただきまして、その時に「竹園銀座」というタイトルで、便利さと喧噪について書かせていただきました。「カッコウの声を聞き、凧揚げを楽しんだ場所が、スーパーや商店街にと変身していって、自然を失う代償として、喧噪と便利さが手に入る」というか、「都市の成長は相反しているものを同時に手にするのは難しいという現実がある」というのを書きました。今もその通りで、やはり11年前に書きましたように、中身は少しずつ変化はありますけれど、「成長している都市だな」と、「10年や20年では本当に断面を語るしかないかな」というような気持ちでおります。

もう一つ、絵画サークルのことについても書かせていただきました。それは地方の方と学園都市の方との交流がない昭和50年頃ですかしら。文化祭の時には絵画のグループがまだ生まれていない状態で、先生方と小学生の絵画の隣に３点ぐらい一般の方の作品を飾っていたというのが、現在は18団体で、251名の絵画のグループがあるんですね。学園の中でも「クレオ」はじめ、「スタジオ'S」とか「ギャラリー吉瀬」など、ギャラリーや作 品展をする空間が充実しまして、文化的な交流が、そういう絵画のことに関して言えば充実してきて楽しくなったな、というところですね。

まだ、ほかにもいろいろありますけれど、書かせていただいた２

点について申し上げるならば、そんなところです。ほんと成長している都市という感じ。

土　肥　　まだまだ、成長しつつあるという…。

生　田　　ええ、どんなふうになるのか、していったらいいのか、成長しているんだなあ、という感じを持っております。

長ぐつからハイヒールへ、そして星空がなくなった

豊　島　　私と花開さん、この土地では一番古顔ではないかと思うんですが。62年ですか、私がここで生まれて育っている年数が。一番驚いているのは、まだ今みたいに格好いい車が入らない時代、まさにこの建物の真下でもって、松の葉を採集しました。車なんか入って来られないような道で、もちろんマムシもいました。それで、自分の家からかなり離れてお弁当持参でここへ作業にきましたけれど、今やそれが中心街という皮肉な逆転した現象になりまして、当時、この場所は桜村の僻地でした。非常にとまどっているのが現状で、簡単に結論的に申しますと、「長靴は要らなくなった」と、「ハイヒールで歩ける」と。ところが、「星空がなくなっている」というのが、私の実感です。

土　肥　　ということは、「昔の星空は今よりはだんぜん素晴らしかった」ということでしょうかね。

豊　島　　自然がね。

土　肥　　だって、東京あたりから帰ってくると、「星空がきれいだな」と今でも思うんですけれども（笑）。

豊　島　　われわれのイメージでは、まだまだきれいだったと思います。おふくろが年をとっていくように変貌しています。

学園都市の建設は農村にとって大きな波紋だった

中　根　　私は、結婚という形でここに来て、およそ30年ちょっとになりますでしょうか。変わった部分とそうでない部分と両面あるわけですが、表面はあまり変わっている様子はないと思うんです。学園都市は学園都市、農村地帯は農村地帯として、それだけかたまっていますから。でも、生産現場に働く人たちの姿がものすごく高齢化しているんですね。このままでいくと、田圃や畑も荒れますし、それから心までも荒れてしまうんではないかしら、という不安を持ちますね。

学園都市が出来始めの頃は１反歩30、40万で売れるということで、周りの人はびっくり したわけです。それまで田圃や畑というのは売れるものではないと思っていたから。人によっては1000万も入った。1000万というのは当時気の遠くなるような金額だから、今度は相続の心配とか、それから暴力団がらみとか、相続についての土地の奪

い合いとか、いろんな汚い面が出てきたわけですね。それから税金が高くなったとか。このまま税金が高いと、田圃や畑が持ちこたえられない。田圃や畑からあがる収量というのは、しれたものですから。そこでもって夢が持てなくなると、若い人たちは当然農業をやらなくなる。それで今、「困った、困った」と。しかし、困ってもなんとか「自分たちが生きているうちは守らなければならないんじゃないか」ということで頑張っているわけなんです。どうしたもんでしょうかね。

成長期にあるっていっていますけれど、とにかく学園都市ができて、新しい人たちと、それから古い人たちとのその交流がまだまだなんですね。意識した人たちはけっこう交流していますけれども、やっぱり交流を通じてお互いが理解し合う関係というのがとても大事だと思うんです。

特に学園都市になりますと、星空は見えなくなって、長靴は要らなくなって、そのかわりハイヒールで歩けるような状態になりますと、土が見えなくなってくる。生産の現場が見えなくなってくる、感じなくなってくる。そうした時に、人間としての、いかに人として生きるかの原点を見失いがちなんですね。それを、私たち農家で自然の四季の中で生きるものたちがどのような形で知らせてあげることができるか。これは大事な使命ではないかと思うんです。

ずっと意識して新聞を発行したり、それから、いろいろな雑誌に「作物の育つ要素」といったものを発表してきたんですけれど、まだまだ作物を作る側の、土に生きる者の声が低すぎるんです。知らない人たちの声が大きすぎるんです。どうしても街からの無理な要

求が、そうでない人たちのところに押しつけられがちなんです。それはなかなか気がつかないことなんですね。だから、街が発展すればするほど恐ろしくなるような感じを受けます。これから、さらに、理解しあう関係を築いていかなければならないんじゃないかな、と思います。

建設当時、行政と住民に良いコミュニケーションがあった

花　開　この座談会の通知を受けましてから、「長ぐつと星空」の本を久しぶりに開けてみました。ずいぶん前のことでみなさんの顔がおぼろげになってきたのかな、と思いましたが、本を開けた途端、島さんはじめみなさんの顔がワッとこう、浮かんできましてね。「ああ、そんなに遠い時代ではなかったんだな」と。それからざっと目を通した中に、当時の桜村役場と住民の間、特に学園地区との間の付き合いで、こんなに多くの話し合いがあったのかな、と思い出しました。当時は言いたい放題、「うるさい奥さん方」というような表現をしたことがありましたけれども、今になってみれば貴重な意見。それから、それに尻を叩かれまして、行政の方も小さな役場でしたけれども、やる気になって、本気になって解決しようと。ですから今日、島さんの言われるように「もうまったく不足はありません」というような街ができたのは、やはり研究学園都市を作った国の力、それからやっぱり、入居された方、協力された住民の方の意見、それから小さな村の行政という、3者が一体になって今日ができたのかな、と。ただ金があって技術があって今日の筑波研究学園都市が

整備されたということではなかったと。

それを思うと、なんか最近は当時のような話し合い、いわゆる行政と住民のコミュニケーションがどこへいってしまったのかな、というような、ちょっぴり寂しい感じもするわけです。特にまあ、私はつくば市役所を定年退職して、今、県の仕事をしているのですが、つくばの一市民として振り返った時に、当時やはり真剣になって、「これがなきゃ生活が困るんだ。明日の生活をどうしてくれるんだ」というような声が出てきたし、それを真剣に受けとめ、関係機関に働きかけた、というようなこと。今日、筑波研究学園都市を中心につくば市がこんなに整備され、不足するもの、不自由するものがなくなると、行政と住民があまりものを言わなくなって、遠のいてしまったのかなと、ちょっぴり寂しい感じがする次第です。

普通の街になる

土　肥　今までのみなさん方のご意見で、お互いに「いや、そうじゃない」とか「やっぱりそうだ」とか、いろいろとあると思うんですが、先ほど島さんがおっしゃった、「生活環境としては非常に100％」という、整備されてきたけれど研究学園都市のイメージとはちょっとズレがある、そこらへんはどういうズレと思ったらいいでしょう。

島　それはあの、私が非常に浅学だったためかもしれませんけれど、最初は頭脳集団の理想郷みたいな宣伝に踊らされていたんでしょうか。ちょっとそういうことも思って、そして、役場のほうにお願い

するにしても、「こんなふうな青写真ができているのに実際は違うじゃないの」なんて言ったような気もするんです。

だんだんと普通の都市になりつつあるということが、最初、私が思ったイメージと一番違ったところですね。また、単なる普通の街ではなくて、そこにまた一味違った街として成長させるために、これからの我々の力量が問われているんではないか、というふうにちょっと感じています。

土　肥　今、奇しくもおっしゃられた、普通の街になるということが、多分、私なんかは最終目標だと思って、街づくりにかかわってきたつもりなんですね。特徴があるということは、当然どの街にも特徴があるわけで、普通の街にも特徴がなければ困るわけですけれど、片寄った特殊という言葉をね、できるだけ早く取り除く、どうやったら取り除けるか。そのためには「いろんなタイプの市民のみなさんが混ざり合って影響し合いながら、暮らしていく」という、そういう姿だと思うんですけど、それに関連して、木原さんのおっしゃった質の問題は依然としてやっぱり残されている問題ですか。

新旧の感性の違い

木　原　難しい問題があると思うんですが。やっぱり生活環境、特に旧村にお住まいになった方と、われわれ、よそから入ってきた人間との間の、考え方というよりも、感じ方、感性というのか、なんか非常に難しいところがあるんですね。ひとつ、こういう例がいいか分か

りませんけれども、私があるところへお料理を教えに講習に行ったんです。そして、お皿に盛る時に「できるだけ周りは空間を空けて、真ん中にきれいに盛ってほしい」と。そうしたら批判が出まして、「そんなことしたらケチだって言われる」「山盛りに盛って、とにかく出す」と。で、ちょっと驚いたんですが、そういうことをどうやって訂正して、「こちらの方がいいんだ」ということを言っていいのか、そういうことは言わなくて、やっぱりその場所ではそれがいいんだということで、こちらが一歩引いていればいいのか、そういうところで大変私は、一時期、あらゆることで悩みを持ったことがあるんです。で、解決していないんです、全然。

でも、少しずつ分かっていただけたかな、という人たちが増えてきたようにも思うのです。でもそれは別に、こちらがそういうことを教えなくちゃいけないということではないのですけれども、「どうしたら物がきれいに見えるか」とか、そういうことっていうのは分かってほしいなというような部分が、時々あるんですね。それが街づくりとか、いろんなことに影響があるような気がするんです。看板の色にしても、屋根の色にしても。なんかわれわれが一主婦としてできること、そんな大きなことはできないんですが、小さなところでそういう感性を養うのも重要かなっていうふうに思うんですね。

新住民は渡り鳥

豊　島　　価値観の相違はあって当然。興ずる部分も違いますし、生まれて

育った土地が違うでしょう。関西と関東では食べるものにしたって、全く逆な味の好みがあるのと同じで。それはもう、かえってあった方が、ナマリと同じでもって、国の手形でいいと思います。

島さんたちがこの都市の将来展望とか、どういうふうになるんだろうといっておられましたが、われわれがインディアンで、白人が大勢来た（笑）というような感じだったんですね。それで、その当時の藤澤勘兵衛村長、体は小さかったが偉大なる人でしたよ。もっともその当時は旧村サイドから、村政に対しての苦情とか注文とかいうのは、農村地帯ではほとんどなかったんですね。イエスマンばかりで。それを島さんたちがやったんで、珍しがって、「うん、カアちゃんたち、もっとやりなさい、やりなさい」でもって、村長は半分楽しみながら、その新住民の意向を受けとめていた。

一番苦労したのは花開さんたちですよね。これを具体的にどうするかでもって。私はその間に入って、朝市をやりながら、みなさんに野菜を買ってもらいながら、村長との間をとって、「村長、こういうことを今度はやってもらいたいそうだ」という、非公式な根回しをしておくと、島さんたちが何人かで徒党を組んで押しかけてくる、というのが（笑）主なケースだったんですけれど。

また、渡り鳥のような感じもします。ご存じのように渡り鳥も、国際的な国から国、白鳥なんかそうですね、日本からシベリア。それからムナグロ、今来ていますけれど、オーストラリアからカムチャッカまで。国際的な渡り鳥ともいえる。ここではカケスとヒヨドリが、筑波山へ行って涼しい夏を過ごして、もっと北まで行っても青森県まで行くかどうかなんですが。

土　肥　季節的な渡り鳥ね。

豊　島　ええ。研究職、国の機関の方たちは国内の渡り鳥で、学生諸君は国際的な渡り鳥。国際的な渡り鳥というのは、いたずらをしていくんですね。国内の今言ったカケスとかヒヨドリというのは、われわれに、「さあ、枝豆をまきなさいよ、とうもろこしの種をまきなさいよ」というような季節の予報を的確にくれます。ムナグロ、白鳥は、というと、こちらからエサをまいてもらって寄ってくるだけでもって、なにもこっちには……。美しさは残していってくれますけれどね。ムナグロってのは昔、稲の苗を栽培する時の苗代に、大きないたずらをしていた鳥なんですがね。なんか今の筑波大生、ゴミばかりここへ置いていくような感じなんですね（笑）。彼らから税金は取れないし、お金はかかる一方で。その辺のところが、ちょっと寂しく思いますがね。それがやはり、星空がなくなってるというようなひとつの要因かもしれません。

農村の慣習は歴史的な意味がある

中　根　さっきのお料理のことなんですけれども、こちらの方、男の人ですから、気づかないかもしれないんです。でね、やっぱり庶民は、昔貧しかったという歴史があるわけです。特に農村っていうのは力仕事ですね。大部分が力仕事をしなければなりませんので、食わなければ仕事ができないでしょ。それと、人が大勢集まると、ごちそ

うですよね、晴れの日とか。まあ、お葬式もありますけれども。人寄せの時には、「普段食べられないものが食べられる」というような、ひとつの喜びがあるわけです。それを目当てに、皆さん集まってたくさんごちそうを食べるわけでしょう。そこへね、ポチッと盛られてはどうにもならないわけですよ。ねえ（笑）。

学園の人たちっていうのは、ほんのちょびっと、よくまあ、あんなものでね。カスミでも食べてるのかっていうぐらいしか食べないんですね。その代わりすてきな細身のスラッとした体型を保ってます。でも私たちは、とてもそのぐらいじゃ、身ももたないし、精神的にもストレスを抱えていますから、とてももたないわけですよ。

木　原　そういうことですね。

中　根　やっぱり、みなさん学歴の高い方が多いことは、もちろん能力の差もありますけれど、経済的な裏付けがないとね、やっぱり上の学校へ進めないわけです。それなりの経済的な豊かさがあったわけですから。そうしますと、きれいなお皿に盛って、お皿の部分が見えるように、それで食べることも楽しくっていうようなね、生活の彩りっていうのは豊かだったと思うんです。

農村はまず、「命を守らなければならない」というのが常にあるでしょう。その命の原点である“食い物”を作らなければならないということは、大変なことなんです。まず“食う”ということ。そこでの差が、そういうふうにきれいに盛りつけて食べるか、ドカッと盛って、ケチに見られたくないというような差に出てきているん

じゃないかと思うんです。それが、いろいろなところで尾を引くんですよね。

木　原　そうですね。それは端的に表れた一つの例ですが。いろいろあると思います。やはり、われわれが農村を本当に知らなかったためですよね。

中　根　そうですね。庶民の過去の悲しい歴史の上に、そうした今があったということですね。これから経済的にも、それから精神的にも豊かになるにつれて、やはり美しいお皿でポチッと盛って、楽しみながら食べるということに徐々になっていくと思いますし……。

島　そうじゃなくて、両刀使いが出来るということじゃないですか。

中　根　そういうこともあります。

子供達は新しい市民として育っている

島　たくさんも食べられるし、食べる方法も。旧村の子供と新住民の子供が本当に一緒になって、別け隔てなく教育されたことは素晴らしいことだったと思うんですね。だから、新住民の子供が旧村の家の広い縁側を走ってみたり、旧村の子供が狭い公務員宿舎に来て本の山にびっくりしたり、そういうことから今度はだんだん年月を経ていけば、ここに育った人はたとえ旧村の子供であっても、頭脳労

働者の生活がどういうものだ、ということを頭の半分では知っている人間になっていくわけです。一番端的なことは、茨城弁と標準語を使い分けられる人間が既に育ったということ、これはやはり私は画期的なことだと思うのです。

まあもちろん、木原さんがおっしゃっていた、そういう文化もあるし、田舎風のもてなし方もあるという、両方がここでは混在していけるところだと思いますよ。だからお互いにそれを知り合っていけばいいんじゃないですか。どっちがいい、ということではなくて。

中　根　そうですね。「なるほどな」ってお互いに理解し合うという。とてもすばらしい考慮だと思いますね。

新旧の交流を考える

生　田　同じような経験を私もしております。12年ほど前、まだ桜村の頃に広報紙の特派員をさせていただきました。そのレポートをしている時のこと、農家に取材にうかがった折に、おいしい漬物をごちそうになったんです。私は公務員住宅に住んでおりまして、核家族で生活しています。お隣の方がおいしいものをごちそうしてくれたりしますと、すぐ「作り方を教えて」って言う。「じゃあ、私の自慢のお料理も作ってみて！」と、お互いに割と簡単に教え合うんですよね。そうすると各国のお料理が覚えられたり楽しいということで。その同じ調子で農家の方にね、「教えて」って気軽にお話したんですよ。そうしたら「おいしいなら持っていけ」とおっしゃるんです。

私が「作ってみたいんです。教えてほしい」と言うと、やっぱり「持ってけ」と言うだけ。「教えてくれないんだな」と思いながら、まあ、話をうかがいながら食べていたんです。そうしたら、「学園の人は何でも教えてくれと簡単に言うんだから」と、最後にポツッと言われたんです。

もう、この一言がものすごくショックでした。土地の方の生活に土足で踏み込んでいるということに全然気づかなかったんですよ。だって代々ね、まあ婆ちゃんの代から守って、また自分の味を加味してね、おいしいものを作り上げる、いわば秘伝ですよね。それを「簡単に教えられるか」というところだったんじゃないかと思うんです。それを私たちは簡単にね、お隣の人と教え合うように、「教えて」って。で、私、そのポツッと言ったその言葉で、本当に一日寝込んだんですよ。カルチャー・ショック！（笑）。でも、「また食べにおいで」とは必ずおっしゃって下さるんです。そしてお土産に持たせて下さって。次には自分の工夫した味を持って行ったりして……。「実はこの作り方かしら」なんて言いながら仲良しになって、何回かのうちには「じゃあ、教えてやっぺ」と。そして、「いつも食べ物ばかりだけんど、たまには蛍でも見に来ねーけ？」みたいなことで、また違う交流が始まったりして、やっぱりお互いの文化をね、少しずつ交流するというようなことが、ここにきて初めて私も経験できて、本当に有り難いことですし、これからもそれが続けばいいなというふうに思っています。

土　肥　　私はよく分からないんですが、そういう初期においでになった方

というのは、ある意味では必要に迫られて、農家の方との交流とかね、もちろん単に必要だけだったとは思いませんけれども、少なくともそういう必要があったことは事実だと思うんです。最近おいでになる方、どんどん入れ替わったり、新しく来ておりますよね。そういう方については、やはり同じようなことを、同じような体験をなさっているんでしょうかね。

島　できてないんじゃない。

土　肥　必要がなくなったっていうこと…。

島　必要がなくなった。

木　原　だから、ある意味では希薄ですよね。旧村とのお付き合いなども。

最初の頃の一生懸命さがなくなった

中　根　私はここへ来て、30年あまりもずっと農業してるわけです。で、感じることは、最初のころはみなさんとっても一生懸命だったの。「とんでもないところに来てしまった」とか、「こりゃ大変だ」というため息みたいなものが聞こえたんです。それで、食べることに対しても一生懸命で、援農としてね、2時間でも3時間でも、1時間でもって、子供さんや赤ちゃんを隣の人に預けてまでも、一生懸命手伝いに来てくれたの。

ところが、それは今なくなっちゃったのね。代わりにちょっとお金を出せば、いくらでも安いものが、外国の農産物が、きれいなものが手に入るでしょ。苦労しなくたって手に入るでしょ。みなさん来たばっかりの時には、自分でじかに手に触れるってことができたわけ。作物を踏んづけないように畑に降り立って、草を抜くってこともできたわけ。そういう体験がね、全く途絶えてしまった。そうなると、そこから芽生えてくるものはどうなんでしょうかっていうような心配をしてます。

木　原　そうですね。

生　田　意識が違いますよね。

木　原　さっき、ほら、「選ぶものがない」と、私ちょっと申し上げたでしょ。グループ活動なんかもそうなんです。自分たちで作ったものをね、やっぱり一生懸命育てようと思って、古い人たちは頑張ってきたんですよ、20年も25年も。だけど、今、たくさんある中から選ぶだけの人たちというのは、自分が努力しないから、すぐにやめたり、長続きしないんですよ。そういう現象がやっぱりありますから、なんか似てるような気がしますね。大事に育てるということが、比較的なくなったんですね。

中　根　それで、当初いらしていた方たちは、最初、渡り鳥みたいな感じで、ここに住むような感じではなかったんです。そういうふうに見

せなかったんですね。ところが最近は、そういう古い人たちは土地を買って、ここをついのすみかとして住宅を建てて住むようになったんです。そうしますと、この街が「おらが街だ」っていう愛着がわいてきたんでしょうね。そういうところで、一緒に、「素晴らしいこの街に生きて良かった」というような街にしていこうって気迫みたいなものが感じられるの。だから、「同じ仲間として残された命を一生懸命生きてみましょうね」っていうような、とてもいい関係ができてるのはわれわれの時代で、次の時代にそれをどう伝えていくかってことが、非常に大きな課題ではないかと思っています。

土　肥　人間ってなかなか必要に迫られないとっていう面があって、頭では分かっていても体が動かないってところありますよね。

定住することが市民の参加意識を変える

生　田　地域のお祭りがそうですよね。17～8年前は役場主催の村民運動会があったんです。ところが1、2年で転勤してしまうことが分かっている方は、「忙しい」とか、「ちょっとそのお休みの期間はどこか旅行に行くので」「学園都市から出て行きたい」、そんな住民ばかりでは運動会が盛り上がりませんよね。ところがずっと住むことが分かっている今、「やっぱり出よう」ということで、参加意識っていうんですかね、その自分の住むところがふるさとと思って生活してるかどうかという個々人のスタンスの違いが、お祭りへの参加の仕方、行事のかかわり方に出てしまいますよね。本当にプライ

ベートなことなので、街に対する思いを統一するのは難しいところがあるっていう話ですよね。

島　まあ、今、ＮＴＴにお勤めの方は、本当に２年で転勤してますものね。だから私が思うのに、学園都市は公務員の宿舎でみなさん生活が始まったわけですけれど、その中に２年転勤の人が少なかったっていうのは非常にラッキーなことでしたね。そして、その２年で転勤しない人たちがなんとかついのすみかを見つけようとしています。実は私の娘も小学校５年生からここに来て、すでにもう結婚して子供ができて、ここについのすみかを造ったわけなんです。で、やっぱり自分の家ができると、自治会に対する考えやなんかも、親の私がびっくりするほど変わってきますので、これからやっぱり公務員宿舎を出て、自分の家を造る人達が、本当にこの街づくりに参加する主役になっていくのかもしれません。

土　肥　やっぱり定住するっていうことでしょうね。

島　定住するっていうことですね。

生　田　そう思います。

便利さと環境とのバランスをどうとるか

土　肥　この定住化をどうやって進めるかっていうようなことも、非常に

問題になってくるんじゃないかと思いますけれど。

あと、さきほど生田さんがおっしゃられたことで、学園銀座のお話で、要するに便利になるっていうことと、騒々しくなるってことは一緒にやってくるというね。これはまあ、どんな変化にも一面だけではなくて、両方の面があるってことだと思うんですけれど。ただ、度合いというものがきっと、その間にはあると思うんですよね。だから、どっちかが非常に強くなってくるという、例えば、うるささの方がすごく強くなるとか。そういうことになれば、便利さは少し我慢しても、うるささも減らそうとか。そういうことになると、結局街づくりというのはそういう判断をしていくことだと思うんですけれど。今の状態はどうでしょうかね。バランスは取れているのか、ちょっとうるささの方が、出っ張ってしまってるのか。

島　私、いつも思うんですけれどね、これは非常に個別的な価値観によって左右されるんですね。昔ね、東大通りがまだ完全にできてない時、「東大通りができたらうるさくて大変だ」って騒いだ公務員が竹園３丁目にいるんですよ。それから思えば今はもう非常にうるさいけれども、今、３丁目の宿舎に入ってる人はおそらく東大通りがうるさいなんて、誰もクレーム出してないと思うんです。だからやっぱり人間って、個別的なその時の状況で要求度っていうのが違うから、街全体としてみんなが満足する、その満足度っていうのは難しいですね。

土　肥　もちろん前から住んでおられる方と新しく来られた方では、もう

基準が全然違うでしょうしね。すごく不便でもっと便利にならなきゃ困るという人もいるでしょうし、まあ、もうこれ以上便利になる必要ないから、車の数は増えない方がいいと思う人もいるでしょうしね。

島　そうなんですよね。

生　田　住まいの環境にもよりますものね。

土　肥　だから、そういうことを全体としてどう判断したらいいかっていう…。

島　そうそう、そこが難しいとこですね。

木　原　まあ、今や一軒に二台はおろか三台の自動車を、みなさんお持ちで。やっぱり、だんだん緑が伐採されてますね、住宅の中も。あれは実に寂しいと思うんですけれどね。

新旧とも年代による価値観の差がある

花　開　車のことを言えば、いわゆる価値観の比較対象の相違ですね。新しく来られ学園地区に住まわれた方と、周辺の農村で長く住んでおられた人のね。さきほどのごちそうの盛り方にしても、それはそれなりに必要があってその特色が生まれてきたわけですから。どうし

ても、学園地区の人と周辺地区の人の価値観というのは、だいぶ違っていましたが、今日、あれからもう20年も25年も経ちますと、単に学園地区と農村地区の比較じゃないような気がするのです。年代的な価値観の相違が出てきたのです。

農村地区においても若い人の世代と、私どもの世代ではずいぶん違います。環境の問題でも、若い人ですと、「うるさくてもいいからもっと便利になってほしい」「緑が少なくてもいいからもっと学園地区の延長みたいなものがほしいよ」と。それが高齢者になればやっぱり、学園地区の中に住んでいる方でも、「もっと緑がほしいし、静かな場所がいい。不便でもいい」というようなことを望むんですね。ですから、将来の考え方についても学園地区住民と周辺地区住民の調和だけにとどまらずに、年代の相違など家庭でも地域でも話し合って将来を見つけ出していかなきゃいけないのかなと思います。

例えば、ごちそうのお話でもそうなのですが、一家庭でも二世代あたり同居してると、全くさきほどのような問題がありますね。若い人たちは量よりも味の良いもの、質を好みます。われわれみたいにうんと働き、肉体労働して胃袋の大きくなってる人は、そんな良いものよりももっと量のあるもの、味の濃いものを好みます。そういう小さなことがいわゆる多世代同居の難しさを生んでいます。住まいの作り方もそうですね。

島　ああ、そうでしょうね。

花　開　ですからここで、良い街ということを考えた時に、いわゆる周辺の特色、それから学園地区の特色というものを十分考えて、私どもの住む街づくりについては、お互いに譲り合って、じゃあ若い人はどこで我慢していくか、また高齢者も自分の考えを100％求めるのでなく一歩引いて、ということが必要ですね。特にこれからの開発ということになると、そういう年代の相違の調整というものが大変難しくなってきてるのかなと思います。

中　根　農村でも徐々にですけれど、屋敷内別居で、二世代が一緒に住む家が少なくなってきた。当然のように、若い人たちは家を別に建てまして、お風呂から食事まで別なんです。

土　肥　普通は大体、若い人の方からそういう話が出てくるんでしょうかね。

中　根　やっぱりそうだと思いますよ、若い人の意見を聞いてね。それでなかったら嫁さんが来てくれないもの。食べ物も第一違うでしょ。お風呂だって「同じ風呂に入るのは汚い」って、年寄りが入った後は汚いような感じを、あんまり口には出しませんけれども、仲人さんを通して「お風呂も別に」なんていうことは、最近はごく普通です。若い人たちの別宅を建てて、それで食事もお風呂も別っていうのは普通になりつつあるんです。

豊　島　うちなんかつくば市全体を圧縮したみたいで、四世代住んでます

から。95歳を頭に、下は6歳ですか。これが同居して昔と同様の生活してるんですが、子供たちは私と違って、新しい人たちと職場が同じなので、家族内で新旧が存在してる。だからうちでは、孫になったら考え方もかなり違います。小学校3年の上の孫なんか見てると、最初に私が学園地区の人と接触した時に感じた、その人たちと同じような考えを持ってる。呆れ返るべきかそれとも喜ぶべきか、ちょっと判断に迷ってるんですが（笑）。

だからそういうふうに近所を見ると、今、中根さんが言ったみたいに、若い人たちがかなり希望が強くて、今までのうちみたいな家族制度がどんどん崩壊していく。間もなく、うちみたいなのは無くなっていくんじゃないか。私がその場に立たされれば寂しいんですが、そういう立場に立ってる人は、割とあきらめて自分自身を納得させているようですね。「もう流れには逆らえない」というようなあきらめですか。決して内心は喜んではいないと思いますよ。だから、今までの農村地区でも、親戚の者がある日訪ねてきたらミイラになっていたのを発見したというような、都会並みのこともあると思います。

花　開　ですから、そういう中で私は、これからは学園地区と周辺地区の人が楽しく、無理のない年代別のお付き合いをしてはどうでしょうかと思うのです。学園地区の若い人は周辺地区の若い人とスポーツを通して、あるいは趣味のクラブなどを通して交流を図っていく。年配の方も「もうわれわれの時代じゃない」などということは言わずに、周辺地区の人たちも非常に活発になってきていますから。当

時40代ぐらいの人が、もう60代からそれ以上、われわれの年代でも学園地区の人たちと同じ話題もあるはずですし、同じ価値観があるはずですから、そういうところで大いに交流してみたいなという感じがしますね。

これからの楽しみというのは、「学園都市がこのつくばにできてよかった」と。まあ、二次的な楽しみの期待ですね。一次的には、もういろんな施設ができて便利になったし、学校も出来た、医療機関もたくさん出来た、それからショッピングも身近にいろんなものが揃ってるよということで満足してますが、私どもの年代から言うと、今後の二次的な楽しみというものを求めていいんじゃないかなと思います。

さて、口で言うはやすしなんですけれども、やはりそのきっかけをどこで作るか。なかなかきっかけができないのですね。ですからそこらへんは、以前、学園地区の人たちの不平不満を聞いて行政が手を差し伸べたように、あと一遍振り返って、学園地区と周辺地区の密接な関係が結べるような方法、きっかけを作っていただき、住民は進んでそれに参加していく。年代別の交流なんか非常に楽しいんじゃないかなと思います。

市民農園

島　そういう意味でね、農協がやっているシビック農園で今、豊島さんがインストラクターというシャレた名前の役割をしているんですが、「昔、農業に対して何も無知で、ただ好奇心だけは持っていた

新住民との、その頃の接触の経験が役に立った」と言って下さって、新々住民の人たちの農業遊びから、また個人的な家族的な付き合いまで新しい交流の場を彼は増やしているようですよね。あれは大変良いんじゃないかと思います。

豊　島　今、市民農園で約100家族の方たちと一緒に楽しませてもらっているんですけれど、さっき生田さんが言いましたよね。「これ、おいしいから教えてくれ」と。例えば「白菜の漬物がおいしかった。教えてくれ」と言ってもこれは無理な話なんです。みなさんが漬けようとしたって、せいぜい1株ぐらいでしょう。ところが白菜なんか5株とか6株とかって大量に漬けなきゃあれだけの味は出ないわけです。量の問題なんです。教えない問題じゃない問題もあるわけです。

農業を今指導していますとね、「私にもできましょうか」「どうやったらできます？」というような質問を受けるんですが、とにかく「野菜作りは太陽と水、それと皆さんの愛情があれば立派に育ちますよ」と私は言っていて、細かいことは言わないんです。ところが本当にやろうとしたらもう大変ですよ、農業なんか。自然相手ですから。

今年なんかもう既に不順な天候が始まっていましてね。遅霜、おとといの朝なんかも遅い氷が張りましたしね。そういう意味で、昔われわれが朝市でもって接していた主婦の方たち、消費者のほうも生産者のほうも必要に迫られてやっていたから、お互いある程度あきらめがありましたけれど、今度の農園なんていうのはそういうこ

とはないんですよね。嫌になったらポッとやめちゃう。大体やめる人の3分の1くらいは、中根さんが今かかえています、有機質無農薬というのを建前に張りきってくるわけです。やってみると病気と虫にコテンコテンに打ちのめされてね、やる気がなくてやめていきます。あとの3分の2の人は、「うん、じゃあ、あなたに教わって安全な農薬、殺虫薬の使用からまた出直してみよう」と。非常に頼もしく感じています（笑)。

生　田　だから島さんが、「農園遊び」とおっしゃるのはそういうことなんですよね、真剣な。

島　まあ、農業もあるし、今、木原さんがかかわっていらっしゃる陶芸という趣味の世界でまた旧村の人との深いつながりもできていますしね。

花　開　ですからどうですか。島さんも同じ年代なのですから。これからは、そういうふうに同じ年代で楽しもうじゃないですか。大いに交流を図ってね。たぶん、話題も共通する部分があるでしょうし、趣味も共通することがあると思うんですよ。農園に行って野菜を立派に作ろうということになると、豊島さんの話ではありませんけれども、挫折しますからね。途中で失敗したら失敗したでね。野菜作りを半分楽しみ、それからお喋りを半分楽しむというような方向でね。そういうきっかけを是非、これまでの経験を生かしたみなさんで作って下さい。

島　　農業が途中で挫折しても、それはひとつの交流の導入部ですから。

花　開　　そうですね。

桜村親戚の付き合い

島　　私なんか本当に豊島さんとは、食べ物を通してつながった仲ですけれど、お互いに親戚を自認してるほど、婚姻関係から進学関係から、全て絡まって深く交際が進行してますから、そういう桜村親戚っていうような方たちが、かなりできました。木原さんもそうですし、生田さんも。古い方は「ああ、あそこは親戚同様だな」と思えるような関係、必ずできてますもんね。だから、そういう交流から、今度また子供同士の結婚とか、いろいろと混じり合って都市が熟成していくのかなと思います。

中　根　　やっぱり、有り難いことにっていうか、おかげさまでっていう、もう年代なんですね。うちは夫と家族二人なんですが、でも、二人で晩ごはん食べる時よりも、若い人たちが来て一緒に食べる回数の方が多いんです。筑波大の学生のみなさんが、年間、何百人か来てくれます。それから、恵田（三郎）さんが最近なさった「(農業生産法人・有限会社）つくば遊農」、あそこへうちの人がちょっと指導を頼まれて行ったりしまして、いろんな関係の若い人が来るんで

す。そうしますと、そういうふうに土を通しても、「ハスの天ぷらがおいしいから、ハスをサトイモの隣に植えたい」って。ハスはもともと田圃に作るものなんですよ（笑）。でも、それは知らないわけですよね。あまりにも一生懸命の人はたいてい失敗するんです、さきほどの話のように。そこでゆとりを持って、楽しみながらやっていけば、これは誰でも愛情かければ、大体はうまくいくんですよ。で、これからの私たちの人生は、今まで一生懸命やらせてもらったんで、社会に恩返しする、次の世代を育てるっていう感じでね、まあまあ、残ってる力を利用しながら、やっていきたいなと思ってるんですよ。

そういう点で、分からない人たちには口を酸っぱくして言っても分からない場合が多いわけでしょ。その人が次の人に教える時に、必ずしもその通りに伝えてるかどうかが不安なわけです。ですから、印刷物で「三月になったらこういうものをまいた方がいいよ」「こういうふうにしたらいいよ」っていうことを伝えるようにしてるの、文字を通して。するとね、たいていそれを見ながら電話をくれたり、飛んで来たり。「じゃあ、つくば市内の農園を借りてやってみたい」という人が結構増えてくるんですね。それは、とってもいいことだと思ってます。

研究所と農家

中　根　特に学園都市っていうのは研究所がいっぱいあるのに、その研究の成果を実践するってことに乏しいんじゃないかと思うんです。農

水省なんかにしても、見学した時、ものすごく良い研究をしているんですよ。ところが、それが地元の農家にちゃんと伝えられていないわけです。つくば市内にもこれだけの大きな実験農場があるわけですから、その成果を実践という形で根付かせるということが、やはりちょっと不足してるんじゃないかと思うんです。

木　原　それは花開さんあたりがする？

土　肥　いやまあ、そういう、ある意味で宝の持ち腐れ的なところは、いろんなところにあると思いますよ。

木　原　研究だけでやってしまってね。

中　根　また、研究の中で、例えば筑波大から岡山大の大学院へ行った人なんかもね、雑草と作物との共生とかいろいろと、研究しているわけです。まあ雑草の研究も、そりゃ大事でしょうけど、研究所の中での研究って限られてますよね。そういう言い方ちょっとおかしいかもしれませんけれども。例えばメヒシバっていう雑草があるんです。それを、カブとか小松菜とかを作った時に連作障害が起きるわけ。すると、ネコブセンチュウができるわけですよ。で、いかにそのネコブセンチュウを駆除するか、連作障害を避けるかっていうことが、有機農業を志す者、無農薬を志す者の課題なんですが、その中で雑草との共生っていうのを発見するわけですね。長い間の体験の中から。すると、カブの間にメヒシバがワーッと生えてるのを、

雑草だからと思ってきれいに抜いちゃうと、途端にネコブセンチュウにやられてコブができるんです。で、「抜かないほうがいいのよ」と言ったら「あら、いいことを聞いた」っていうわけね。やはり一緒に行動していく中でその実際の成果とか、また農家から持ち帰り、こちらからっていうような、いい関係ができるわけです。だから、これからはそういうことも含めて、直接大きくは見えなくても、21世紀の提言はそこらへんにもあるのかなと思いますね。

豊　島　私も今度教える立場になったんでね、頻繁に研究所におじゃましているんですけれど、あそこでやっていることは、われわれ現場でもって10年先にやることをやってんのよ。あまりにもかけ離れているの。今あれをやろうとしたら、経済的にやりようがなくて倒産しちゃう。だから、あれをダイレクトにもってくるんじゃなくてね、あれは普及所あたりが行って、半分消化して、それでわれわれに口移しをしてくれるような状態にならないと…。そのラインがまだ確立されていないよね。だから、県と国とわれわれ利用者と一本のラインが必要で、これはちょっと行政だけの努力だとどうしようもない。われわれが自分から求めていかなければ駄目だね。

「新」同士の交流が大切な時代になった

豊　島　さっきも花開さんが言ったように、年代でもって交流したらいい、と。すでにもう始まってるのね。うちの子供たちが全く私と違うってことは、完全に新しい人の考え方、行動の仕方になってるわけで。

今、私どもの貸農園の方へ来てる人たちは30代から50代でもって、圧倒的に30代が多いんですよ。それで、30代の人は、子育ても農園で半分してる。私は、「子育てに疲れた時は家庭菜園やりなさい」と言ってます。野菜と子育てというのは相通ずるものがありますから。

それと、70代になった、もう定年退職してお役目ご苦労さんという人も来てます。本当に好きでもって、野菜が立派にできるのを楽しみに、またそれだけの技術を持ってる、そういう人たちですね。結構、今の新旧の交流よりも、「旧」同士はもう当然、冠婚葬祭でもって強く結ばれているから、「新」同士の交流の方が大切な時代になってきたんじゃないかと思いますよ。前には数が少なかったから、木原さん、島さんみたいな流れが出来ましたけれど、今ほとんどないでしょう、今の人たちにはそんな流れは。

木　原　われわれだと本当にツーカーでね（笑）。

島　もう、家族全体、全部リストアップしていますから。個人の付き合いを超えているのです。

豊　島　今度、農園のメンバーを見ながらね、あまりにも新しい、新住民の方たちがお互いに知らなくて、私ら驚いてます。この20数年というのは、新旧の橋渡しとか、それを促進するという時代。今やそれを飛び越えて、「新々」の交流の時代になってるんじゃないかと思いますよ。

これからはゆとりを持つ街づくり

中　根　われわれはね、「まじめはいいことだ」、それから「正義は必ず勝つ」っていう、そういう時代を生き抜いてきたでしょ、ひたすら。でも、もう一生懸命頑張ったから、これからはもっとゆとりをね、帳尻が合うような生き方を、安心して年をとって、安心して人間を卒業できるような、そんな街をつくっていかなきゃならないと思うんですね。

うちの亭主なんかもこの頃ではね、孫を幼稚園へ送り迎えするのに一生懸命なんです。ほら、おじいさんおばあさんと暮らしてない子供たちってのは、ダッコってしてもらわないでしょ、「重い重い」を。孫は「あおい」っていうんですけど、「あおいちゃんのおじいちゃん、重い重いをやって」って、みんながワーッと来るんです。するとね、子供たち20人も30人も重い重い、ダッコダッコをやってきて「腰が痛い」って言うんですね。毎日のように、重い重いダッコダッコをやってくるわけです。

毎年ね、うちの畑を提供して、子供たちとジャガイモ掘りもやるんです。そこでまた、手品をやってくるんです、クリスマスとかなんかに。すると、「いいね、あおいちゃんは、毎日手品が見られて」って。もう毎日なんか飽きちゃうけれどもね。次々といろんなものを、まあ大したものじゃないけれど、初歩のものなんですけれど。そのうち見事なものに挑戦するってことで、大変なカタログを取り寄せました。それぐらい、これからは農業も楽しく、ひたすら金儲

けとかじゃなくてね、楽しくやっていかなくちゃならないような…。

島　　それはすごいことを学習なさいましたね。

21世紀は女性の感性で

中　根　　これからの21世紀は女性の、命を生み育てる女性の感性を前面に出した、女性の感性にゆだねた考え方、見方、それから行動の仕方、そういうものがね、とても大事なんじゃないかと思うんです。農業っていうのは、女性が命を生み育てるっていうことと同じ、大地に種をまいて、育てるのと同じなんですね。で、過去、あまりにも男性をもり立てて、「男の人が立派よ」っていうふうにね、一生懸命もり立ててあげたのね。

土　肥　　そうとも言えないと思うけれどね（笑）。

中　根　　でも、それがね、戦争に結び付いたんじゃないか、闘争本能剥き出しになって。でも、これからは、もっと柔らかな穏やかな、そういう女性の感性にゆだねた21世紀であってほしいと思うわけ。それで、こういうもの持ってきたんです。急いで今朝、取ってきたんですよ。まだ苗の段階ですね。これがサニーレタスです。これは鉢に植えてね、病気の人とか、畑に来れない人が、枕元で見られたり。

「見られる野菜」

島　見られる野菜。なるほど、ああ、これはいい発想ですね。

中　根　楽しんで、外からこう、食べられるように。それはね、私たち土に生きる者の優しさじゃないかと思うんです。植え込んで、差しあげるためにいろいろ作ってるんです。これはグリーンレタスです。決して亭主の悪口言うわけじゃないし、男の人の悪口言うわけじゃないの。まだ小さいけれど、これくらいになりますと、ちゃんと気をつけて持ってきたつもりですけれども、分かるかな、みなさん、この葉のところに脇芽が出てるの。種をまいてこれくらいまでに育てるっていうのは、結構１カ月くらいかかるんですよ。まあ、余興だと思って聞いて。

でね、収穫する時に、この脇芽の部分をひとつ残しておくの。こういうことやっぱり島さんたちは知らないでしょう。だから知るってこと、見るってことがひとつの体験のわけ。親交のわけよ。ここに私がね、こうしてスーッと斜めに鎌を入れて、収穫ひとつ残しておくわけです。これが残されたほうですね。これが脇芽ですね。葉があるでしょう。これだけを育てた、上を育てた根っこはしっかりしているわけでしょう。その根っこの部分に、もう、脇芽を育てるだけの力が十分にあるわけです。だから私がジャスコに出荷する時にもこれをちゃんと残してるんですが、これをスーッとやる仕草、男の人にはできないのよ。男の人ってサーッと切っちゃうの。「一

芽残してね」と言ってもサーッと切っちゃう。傷つけてしまったり、このスーッとの具合ができないわけ。それをしつこく言ったら夫婦喧嘩のもとですよ（笑）。

ですから、ジャスコに行った時に、「ああ、そんなふうにして切ってあるな」ってご覧になって。で、このようにしてね、ひとつの命をとっても大事にするわけ。そうしますと、これがね、種をまいて植えたのよりもすごい勢いでまたできるわけ。

生　田　一つの芽から二つできるのね。

中　根　二つじゃないよ。次に来るときにね、また残しておくのよ。

生　田　マジックみたいね。

中　根　そう、マジックみたいにね。そして、だんだん暑くなって幾株もできたときには、こういうふうにいっぱいにしなくても、幾株を一緒にして出荷できるわけでしょう。それはね、ずるいことでもないし、命を大事にしているっていうことなわけ。

まあ、息抜きのようなかたちで見ていただきました。

土　肥　どうもありがとうございました。

島　本当に貴重な。

土　肥　　「見る野菜」っていうアイデアは素晴らしいね。

島　　いいですね。緑だしね。

木　原　　心が休まりますよね。

直売所に車で買いに来てくれる

豊　島　　これと全く話は別ですがね、おもしろいことに20年経って全く違ったことといったら、野菜の売り方。われわれは作った物を、みなさんの公務員住宅の前に行って、「持ってきました、お買い上げ下さい」と言ったのがね、今や生産現場のすぐ前でもって直売所というのを作って、みなさんに買いに来て下さいと。20年のうちにまるっきり違っちゃったのね、販売方法が。あの辺はやはり車社会の産物かな。

中　根　　そうでしょうね。

島　　それからやっぱり、住民が産直指向っていうのか、有機野菜とか新鮮野菜の産直指向っていうのが強くなって。

生　田　　作っている現場を見たいっていうね。

島　　現場を見たいとか、生産者の顔を知りたいとか。

生産と販売は両立しない

豊　島　まあ、ここでは産直みたいなもの、朝市という形で最初に始まったんだけれど、私個人の結論としては、生産と販売というのは両立しない、と。中根さんがそれでもって苦労してるんだよ。あれはちょっと両立しないという結論が出たんだけれども、それの反動で今の産直ってのができたのかな。全然生産者の顔が分からないということでもないけれど、前の朝市とは違って、あれほど生産者の顔がわかるもんでもないでしょ、今の直売所ってのは。ちょうど中間みたいな感じで。

島　農家の人も出しやすいしね、ああいう形なら。大したんもんですよ、だって、年間何億でしたっけ。

豊　島　今年は1億5000万ぐらいだったか。

中　根　以前はね、売るっていうことで、その人個人の手腕というか、自分たちの作った作物の気風というか、心意気が伝わるような努力というのをしなきゃ、売れなかったわけでしょ。ところが一緒くたに持ってきてしまえば、そんなに手腕がなくても、並べておけば売れるっていうふうになるでしょ、人によっては。

島　でも、結構買う人は知ってますよ。

木　原　見てるのよね。

島　生産番号見てますよ。

中　根　本人が喋ったりなんかしなくても。

土　肥　ただ、今の若い人は大体、喋るということによるコミュニケーションがずっと少なくなってきてますからね。記号でやるっていうふうになってきてる。

21世紀に向けて「つくば」はどうなったら良いか

土　肥　残る時間も短くなってきたんですが、今までの話の中にもうずいぶん、これからのつくばについてのご意見やご提言もあったんですが、改めて少し、これからというか、21世紀というか、そういう視点でつくばがどうあったらいいかということについて、もう少しご意見を伺いたいと思います。

ええと、大きな問題として沿線開発がありますが、これがどういうことになるか分かりませんが、計画されているように進めば、たぶん、かなりの数の何住民と言ったらいいんでしょうかね、その「新々々住民」がやって来られるでしょう。また都市的な市街地も相当広範囲に広がっていくだろうというふうに思っていて、そうなった時につくばがどうなるだろうかとか、どうなったらいいんだろ

うというようなことで、これは花開さんの方から順番にご意見を、ご意見というか見通しのお話を伺えれば。

花　開　これまではね、研究学園都市の時もそうですが、公共事業、あるいは公的な開発なんかする時には、土地をまず買うことが相当大変だったんですね。ですから、「土地を買うことさえ協力してもらえれば、もう7割も8割もできたと同じようだ」というふうに言われていましたが、今度の常磐新線沿線開発については、値段を決めたりするまでは時間がかかりましたけれども、値段が決まりましたら、あれよあれよという間に3割の先買いに協力しました。

それでも、もう少し残っているようですが、三者協議の中で、売らない者が得するような不公平をやらないために「どなたからも3割は買って下さいよ」と、予定の面積は確保できても全員にご協力をお願いすることになっています。

それでお金になってしまった土地は自分から離れて、あと残っている土地は区画整理待ちということですね。

開発に先立って市民の意見を聞く

それで、これから先、どんな街ができるんだろうということを半信半疑の気持ちで今、待ってるんですが、幸いにして、つくば市が非常に理解ある態度を示して関係者による「街づくり協議会」を組織し、開発について住民の意向を反映させることになりました。これまでは開発行為者が青写真を作って、「さて、みなさんどうでし

ょうか」と提示されて、住民の意向を取り入れたということですが、今回はそうではなくて、まず青写真のできる前に、この区域は開発される予定ということで土地も協力したのだから、その中をどのように開発するのか、また周辺はどうしていくか、例えば自然発生的な開発を好むのか、それとも一線を引いて、あとはもう、市街化調整区域ということでしっかりしたガードを作り、これまでの自然を守っていくのがいいのかというようなことを話題にして、集落会議を開きました。

つくば市内では、70余の集落が今度の開発に関係するそうですが、その集落ごとに3回会議を開き、直接住民から出た意見を要約し、つくば市をはじめ、茨城県と住宅・都市整備公団など関係機関に要望しました。

この中で最も多かった希望は、「開発地域の中の緑をできるだけ残してほしい」ということでした。また、「周辺集落の乱開発を事前に防止できるようにしてほしい」「周辺地区は現在の環境を壊さないで、生活上必要な整備をしてほしい」などでした。

事業施行者（茨城県と住宅・都市整備公団の予定）は、採算面からも慎重に検討されることと思いますが、この住民意向を取り入れられたら、すばらしい街と美しい周辺集落の整備が実現できるだろうと期待しています。

ゴミ問題が心配だ

土　肥　　中根さん、農業なさってる立場から、そういう形で街が変わると

いいますか、どういう影響があるというふうにお考えでしょう。

中　根　暗い予想の方が多いです。というのは、これ以上人口が増えると、ゴミ問題がね、大きく浮上してくるわけです。最近は集落のちょっと人目につかないところにダンプカーで、それから各自ね、いろんなものが捨てられるんです。大変な量です。布団からテレビから、それからベッドのマットからなにからっていう、もうどうしようもないです。昨日あたりもうちの亭主が手伝って、ご近所で処理をしましたけれども、各区では、どこの家でも自分の山やなんかに捨てられてるんで、「区ではとても取り上げきれない」ってことで、個人での協力ということで引っ張り出したんですが。見えない部分、どうなんでしょうかね、そのゴミ問題は。

例えば、トイレの問題にしても、土に返せるものはちゃんと土に返せるような状態でね、できるだけ返せないものとの区別をしてね、ゴミの収集は大事じゃないかと思うんですよ。今、土に返せるものも返せないものも、使えるものも使えないものも一緒くたにして、最終処分場に行くでしょ。やっぱりそういうこと、問題だと思いますよ。

農業離れが促進されるのでは

土　肥　ますます、若い人の農業離れが進むとかね、そういうことはどうなんでしょうね。

中　根　そうですね、今、高齢化してますから、あと５年経つと、さらに

やめていく人もいますし、若い人がやってる場合もありますけれど、それは稀であって、暮らしが立つような農業というのは、やっぱり厳しいと思いますね。

土　肥　ということは沿線開発があろうとなかろうと、同じそういうことになるということでしょうかね。

中　根　いや、やっぱり沿線開発がなされれば、ちょっとうちの方から遠いものですから、直接そうした集会なんかもないので、興味の度合いがちょっと薄れるかもしれないんですが、やはり持ちこたえられずに手放す人とか、いい見通しではない。農業の視点に立ってですよ。農業の視点に立って、命の元を生み出す生産の立場に立つと、どうなんでしょうかね。

農地を売る人が多い

花　開　これまではなかなか譲ってくれなかった農地を、今回は喜んで協力しています。中には喜ばない人もいるでしょうが、大勢としては喜んでいますね。「土地を高く買ってもらって良かった」という話が多く聞かれました。もう３割以上、５割も７割も、「買えるだけ買って下さい」という人もいます。

ということは、これから先、若い人たちが農業を後継する見込みがないし、畑を持っていることにおいて、管理する経費の負担が大変なんですね。畑は、耕作を放棄して収穫が無くても管理費がかか

ります。雑草を刈り取ったり、除草剤を散布したり、それは大変な労力と経費がかかります。ですからこの際、お金に変えられるものならばお金に変えた方がいい、あるいは開発してもっとその利用が高まるのならば、そちらへ協力した方がいいということだと思いますね。

土　肥　あと、さきほどの「事業者の方はどうだろうか」という話がありましたけど、やっぱり、底地値段というか、単価がいいですよね。

花　開　そうですね。

土　肥　それがやっぱり、買収率を高くした理由でもあると思うんですね。バブルがはじけた後も、「こういうチャンスをつかまなければ、売る機会がなくなるかもしれない」ということも作用してるんだと思いますけどね。豊島さんあたりにはどんな影響が。

「つくば」という街が良ければ新線開発は成功する

豊　島　ええ、うちの方では、今度の常磐新線でお金が入った人は、あまりいなかったような感じを受けます。それでやはり、「これからどうやっていこうか」と、やっぱりわれわれ農家の人間には、街づくり、それから街の発展の仕方なんていっても無理で、予測がつかないんですが、いずれにしろ、良い街に進んでいたら人口は増えると思います。よく今、テレビでもって「何々が体に良い」というと、

バーッと野菜やなんかが売れる、ココアなんかまでも品不足になっちゃう。良いものはやっぱり残ってますよ、悪いものが捨て去られますから。人口が減るようだったら、つくばの街は完全に腐ってる、と。その意味では常磐新線というのは、なんか、行き詰まったスーパーが一大目玉を作って宣伝広告をしたっていうような感じで、これで、常磐新線で飛躍的にここの人口が増えなかったら、つくばという街は完全にダメだ、と。

土　肥　それを占うことになるということですね。

豊　島　ええ、だと思いますよ。私らの年代の元農業、ほとんどがご隠居さん、第一線から引退してる人が多いんですが、そういう人の会話ではそういう話がだいぶ出てます。

土　肥　ああ、そうですか。

中　根　ですからね、老齢化に入りつつあるわれわれは、楽しみながら、細々と守っていってみなさんに伝えていくっていうふうなね。

豊　島　まあ、常磐新線が来てね、10年経ったらもう、ほとんど今の直売所で働いている人の年齢の限界でしょ。体動いても、なぜあんなに稼がなくちゃなんないんだろ、と。ある意味、非常にまだまだ、われわれの世代とわれわれの地域では、周辺、近所の評判というのを大切にしますからね。

土　肥　まあ、豊島さん、もう15年前にね、「学園のそばじゃ農業は成り立たない」と書いておられるんだけれど、そう言いながらやっておられるわけだけれど、生田さん、いかがでしょう。

生　田　常磐新線が開通したとして、街に住む条件として環境がすごく気になりますよね。明かりに関して言えば、中心地区は街灯があまりなくて、小中学生の塾の行き帰りなど治安がいつも問題になっています。若い方から見ると「明かりがないところは活気がないように感じる」と言いますし、明るさがなければ静かさがあるわけで、一長一短ですね。

いつも気になっているのが公園のことです。せっかくこれだけたくさんの公園があるんですから、特徴あるものにしたらいいと思うんです。全部の公園にとは言いませんが、ペデストリアン沿いの幾つかの公園に筑波大の芸術学群の学生の卒業制作のモニュメントを置くんです。そうすると、街の人や子供は触れてみたり遊んだりして、文化的なことに親しむ機会にもなります。他県から訪れた人は、「学園都市の公園にはすてきな彫刻があるんですって」というような評判になって、憩いの場になったり、ＰＲして観光の要素にも十分なり得ると思っているんですが。

それから夢なんですけれど、土浦の花火の日のように、東大通りの車を一日だけ止めて、他県からも参加したくなるようなお祭りができたらいいなと思っています。これだけの研究機関があるのに知らせないのはもったいない。一つの研究所に１テント持ってもらう。

研究所コーナーに行って自由に質問したり、お話できたらいいな、と。

人が訪れたいと思うような街の魅力作りをしないと常磐新線ができても人が集まらないのではないでしょうか。

女性の働く場所が増えるか

生　田　私は西大通りを毎朝通勤するんですが、今、新緑がきれいですね。春は桜、ハナミズキ、サツキなど車を走らせるだけで、自然に癒されたり、感動したりして、小さな幸せを感じてますけれど。

あとは、常磐新線が開通することにより、いろいろな年齢層の居住者が増えますね。職業問題が出てきます。働く環境がどうかっていうことなんですけれど。私、12年前に村の特派員ということから出発しまして、それからフリーライターになり、新聞の連載や本の編集にかかわり、現在デザイン事務所を始めて10年が経ちます。この街の成長とともに育てていただいたようなところがあるんです。多分、東京だったらこういうふうに行かなかったと思うんですけれど。当時、私のように自分で事務所を設立するなんていう女性はほとんどいなかったです。新しいことを思い立って行動すれば実現できる、不思議な街だと思います。今は女性でも会社を持つ方がずいぶん増えてきて、そういう意味では、女性の働く仲間や場所がすごく増えて、有り難いなというような気がしています。

そうすると常磐新線ができた時に、「ＴＳＵＫＵＢＡ」はおもしろいところだというふうになっていないとね。やはり働く女性の受

け入れ体制もできなければいけないし、また、できてくるでしょうしね。そういう意味では、活性化され多様化された街のいろんなニーズができてくるかなとは思いますね。

土　肥　　木原さん、どう思っておられますか。常磐新線に対しては。

生涯教育の場を

木　原　　そうですね、つくばセンターのあたりはいったいどうなるんだろうと思って。今、車だってもう、日曜日なんかすごいわけでしょ。あの辺に車がいっぱい集中して、どういうふうになるのかなあという心配がひとつ。中央にあらゆるものが集中していかないような方策を取らないと、あの辺のゴタゴタは解消しないような気がしきりにするんですね。

今、筑波大学の公開講座に出席してますが、都市の中では要求してる人が以前より非常に少なくなったようです、受講生が。龍ヶ崎、百里基地、それから守谷ですね、あの辺の方なんですよ。都市の中では飽和状態になったのかな。それと選ぶものがあるんですね、たくさん。

だからそういう意味では、周辺にも学習できるような、生涯教育を受けられるようなものを作っていけば、要求はある程度満たされるし、非常に重要じゃないかなと思うんです。周辺には要求があるんですよ。自動車でかなり時間かけて、大学まで夜いらっしゃるという方が多くいるわけですから。だから、ぜひ沿線にも設立をして

ほしいのと、やはり、われわれ公務員ですから、定年を迎えた人たちが東京へ出るのに、多少そういう便利さが手伝って、就職の幅が広がるかなというような、多少希望は持っておりますが、まあ、私の主人などはとうてい間に合わないんですけれど（笑）。そのようなことをちょっと考えています。

宅地を安く取得できるようにして欲しい

島　土地問題をどう考えるかということです。私がつくば市に家を持とうとした時、整理地区内の坪単価が、（昭和）50年に竹園地区で大体８万くらい。それで、もう数年経ったら、あれよあれよという間に約20万になった。それからバブルの最盛期には100万の掛け声が出て、今、バブルがはじけて、約60万ってところ。ところが、私が思うのには、公務員の人が定着するのには60万という単価は、公務員の給与体系からいうと、かなり厳しい。そうするとやっぱりそれは定着できないということになる。

とすれば、今少々、はやりだしてきた借地権方式っていうのが、もっと促進されていいと思います。もうこれからは個人が資産として土地を持つ時代ではないと思います。50年の借地権があれば、もうそれで十分ですよ。50年先に、子供に土地を譲って相続問題起こすよりは、子供たちはどこで生活するか分からないんですから、借地権で安く家を建てて、いらなくなったら地主に土地を返すという、みんなそういう発想になって、地主の人たちも手放さないで持ってるぞ、と。これからも土地開発、もし常磐新線で細かな土地開発が

行われるくらいだったら、どこか第３セクターあたりが、街のデザインを作って、借地権方式でいいデザインの街をつくってもらいたいなということを、私は考えます。

高齢者が生活しやすい街に

今は人生100まで生きるというような時代になってきてますので、定年後の生活 デザインというのがとっても大事な時代に入りましたよね。

で、そういうことから考えますと、私は実家が東京なので、今、東京とつくばと両方で生活してみているんですが、両地区を比較対照してみますとね、まずつくば市は、老後の福祉対策という点で東京都から格段に遅れています。もうひとつは、致命的な足の問題ですね。もう弱ってきたら、私ひとりが運転できるというような状況では生活が成り立たない。だからやっぱり、年をとってきたら運転しないで生活できる街づくりをしなければ、老人を抱えた街としては失格だと、私は思ってるんですね。だから、旧村の方ももちろんそうでしょうけれど、特に地区内の交通問題というのが、私は一番この街にとって重要になってくると思います。今、つくば市の高齢化率は11％くらいですが、例えば土浦とか水戸とかっていうのは、これよりもう少し高いんですよね。茨城県全体では高齢化が進んでおり、つくば市でもこれからは高齢化率が上がっていくんでしょうね。

特に交通問題は高齢者にとって大問題だ

老人がここにとどまれない街だったら、もうそれはやっぱり落第なのかなあと思うんです。その一番のポイントは、やはり交通問題で、バスとかなにか、なんらかの方法で、電気自動車なんかでもいいんですけど、毎日のおかずをヨロヨロしながらも買いにいける、と。ヨロヨロしながらも郵便局にも銀行にも行けるという、そういうものがやっぱり、火急の問題じゃないかと思ってるんですね。

常磐新線ができることで、まず、財産としての土地を売ることによって街づくりをダメにするのを防ぐこと、それとあと交通問題と。このふたつが私は一番、これからの街づくりに大事なことのように思ってるんです。

学園都市と沿線開発をリンクして考える

土　肥　今の島さんのお話は非常に大事なところをついてると思うんです。単純に考えて、1500ヘクタールとか言われてますけれど、学園都市は2700、そのうち1500は研究所ですから。実際に人が住む場所ということだと、学園都市よりも広い開発がされるわけですよね。まあ、そういうことを考えると相当大きな影響がある。

まずひとつは木原さんがおっしゃった、新しい開発のところには、なかなかここのセンターのようなものが一気にはできませんから、相当このセンターに依存して人々が暮らすという時期がかなりね、

あるんじゃないか、と。そうするともっと集中が起こると思われますよね。それもまた交通問題なんですよ、言ってみれば。新しい街づくりの中でバスを中心とした公共交通サービスを整備しながら、学園都市の足りないところをカバーしていくとかね、そういうリンクした考え方をしていかないと、沿線開発は沿線開発ってやっちゃうと、またそっちはそっちで同じ問題がね、起こっちゃう。

島　それがやっぱり心配ですね。どうなるんでしょうと思って。まあ、私が元気なうちは、常磐新線は通りそうもないんで。

高齢者の働く職場も

花　開　つくば市では将来、人口30万人を目標にしてますけれど、今度の沿線開発を全部住宅地にした場合、つくばに職場がなければみんな電車に乗って他に通勤することになりますね。そんなベッドタウンでいいのかな。常磐新線に乗らなければ困るという発想だけでなく、つくばに生まれ、つくばで学び、つくばで働き、老後もね、つくばで楽しめるような街にしたいですね。島さんが言われたように楽しめる街にしたいね。人間遊ぶばかりが楽しみじゃありませんから、やっぱり、退職後もその人たちが第二の人生として働ける場所があってほしい。それには、せっかく土地を提供するのですから、全部住宅用地じゃなくて、地元の若い人も働ける、それから定年退職後の人も働けるような企業立地を土地の利用の中で考えてほしい。やたらと工場を入れればいいというわけじゃないんです。

研究学園都市建設に関連してたくさんの周辺開発をしましたね。西部、北部工業団地、テクノパーク大穂、テクノパーク豊里、テクノパーク桜。そもそもこの周辺開発の発想は、土地提供に協力し、農業を縮小された人たちが働く場所がなくて困ることと、国の施設だけでは税金もあがらなくて困るということもあり、それらの解決策が周辺開発の理念だったんですね。ところが現在、つくばに進出してきた企業を見ますと、西部工業団地、北部工業団地では、地元から採用したという数はごくわずかですからね。

定住しやすい条件をつくる

私は今、県のつくば人材情報センターに勤めています。このセンターは、つくばに立地する国や民間の試験研究機関に勤務する研究者や技術者が、定年退職後も県内に定住し、県内企業に再就職して、生きがいを持ちながら県の産業振興に貢献してもらうよう、退職者と企業の橋渡しをしています。現在は不景気で思うように結びつきませんが、企業の理解もありまして、現在60人ほど登録され、これまでに3分の1くらいの方が再就職でき、生きがいをもって頑張っています。今後、常磐新線沿線開発の土地利用を考える時には、ぜひとも地元雇用のある企業立地を考えてほしいですね。

土　肥　そうすると今まで出てきたお話で、ひとつはやっぱり公務員で、要するに定住した人が本当に街のことを考えるということですから、いかに定住しやすい条件を作るかということが大事ですよね。その

ためにはさきほどおっしゃった借地権方式とか、いろんな新しい方法を、これもやっぱり、第３セクターとおっしゃったけれど、どこかがちゃんとやってくれないとね。それが良い良いと言うだけじゃ動いていかないからね。

長期的視点が必要だ

島　そうしないとダメなんですよね。ミニ開発になっちゃうし。それから私なんかは区画整理のところに早く家を建てて経験したんですけれども、やっぱり第１種にするか２種にするかというので、マンションと戸建住宅をどう競合させるかという問題とか。もう最初にやらなきゃならないことは、ゴミの集積所とか集会所の場所をある程度デザインしておかないと、後から住民が民主的に解決するっていうのは、もう至難の技なんですよね。そういうのがみんな政治と結び付きますから。

最初に、旧村部の土地買収の褒賞として地区公民館が作られましたね。ああいうようなものは非常にヒットした良い政策だったと、私は思ってるんです。今、旧村の人にあれだけの集会所を個々に作れって言ったら、作れないでしょ。だから、やっぱり、ああいうのは先見の明というのか、非常に良い発想でやられたことだと思いますし、それから私がしみじみ思うのは、私が最初に整理地区に住みました頃、あの巨大な公園をつなぐペデストリアンが、利用価値が少なくてもったいないような印象を受けたんです、大きい照明なんかもあって。それが今、見事に生かされているわけですよ。だから

やっぱり、素人の発想というのはダメなもんだなと思いました。やはり都市デザインの専門家が、10年20年先を見越した、ある程度の青写真というのを作ることも非常に大事だなとしみじみ思っているんです。そうしながら、住民には個々に定住権が出るような形にして、さっき花開さんがおっしゃったような、地元の人たちの意見を修復できれば、これは良いかな、と思いますけれどね。

土　肥　まあ、骨格的なものはね、やっぱり100年の計で考えなきゃいけないし、末端のものはやっぱり、その時そこに住む人たちが納得できるようなものを作らなきゃいけないし、それをうまく組み合わせていくということじゃないかと思いますけれどね。

ええと、時間もちょっと超過いたしましたし、まだまだお伺いしたいことはたくさんありますが、まあ、大きな問題は大体出尽くしたんじゃないかと思います。ここらへんで閉じてよろしいでしょうか。どうもありがとうございました。

野　口　どうも、ありがとうございました。本当に「長ぐつ」の時代から、長靴のいらないハイヒールを履いて歩ける街への移り変わり、将来への展望、目に見えてきました常磐新線の建設、それに伴う沿線開発といったような問題を踏まえた将来への提言に至るまで、大変貴重なご意見をちょうだいいたしまして、本当にありがとうございました。

資　　料

本資料は、住宅・都市整備公団つくば開発局の了承を得て、同局のまとめた「筑波研究学園都市における都市活動実態調査」報告書（平成８年１月）より抜粋したものである。

[研究学園都市居住者の生活実態と意識に関する調査]

1．調査の概要

1—1．調査対象地区の選定基準

本調査では、研究学園地区内の公的住宅地（公務員宿舎、県営住宅、公団住宅）、民間住宅地、さらに研究学園地区との比較対照のために周辺地区から調査対象地区を選定した。

1—2．調査方法

調査は質問票留置自記法で行い、調査員が直接訪問により、配布、回収を行った。二の宮の民間の民間高層住宅については、管理上の問題から差し込み配布、郵送回収とした。また、回答者は1世帯から1名のみ、世帯主または主婦のどちらかをあらかじめ指定し、同数となるように配布した。

1—3．調査期間

平成7年9月1日～21日

1—4．配布数と有効回答数

調査票の配布総数は629、有効回答総数は588であった。その内訳は以下の通りである。

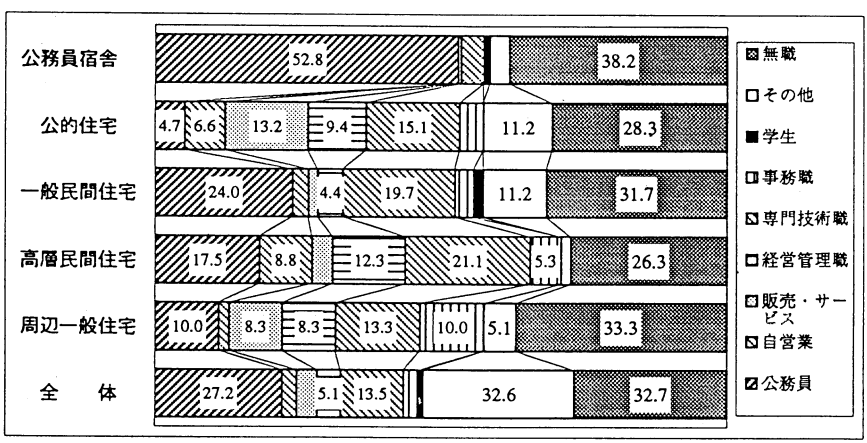
地区	配布数（A）	有効回答数（B）	有効回答率(B/A)
竹園（公務員宿舎）	120	119	99.2%
並木（公務員宿舎）	61	60	98.4%
松代（公的住宅・民間）	127	119	93.7%
二の宮（公的住宅・民間）	141	112	79.4%
梅園（民間）	120	118	98.3%
瑞穂団地（一般市街地）	60	60	100.0%
合　　計	629	588	93.5%

また、世帯主、主婦それぞれの配布数と有効回答数は以下の通りであった。

	配布数（A）	有効回答数（B）	有効回答率(B/A)
世帯主	314	290	92.4%
主　婦	315	298	94.6%
合　計	629	588	93.5%

1—5．回答者の職業比率

全体では公務員と専門技術職の比率が高く、研究学園地区の特性を示している。住宅形態別に見ると、公務員は公務員宿舎以外では一般民間住宅、民間高層住宅で多く、専門技術職は民間高層住宅、一般民間住宅で比率が高い。また、民間高層住宅で自営業が多い。公的住宅、周辺一般住宅では各業種がほぼ均等に分布している。また、無職はその大部分を主婦が占めている。

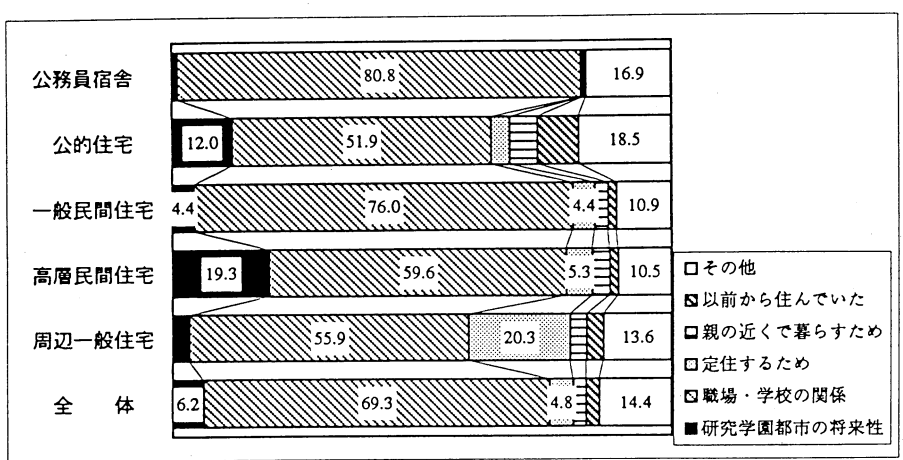


2．調査結果とまとめ

2—1．研究学園都市への転入理由と定住意向

①転入理由

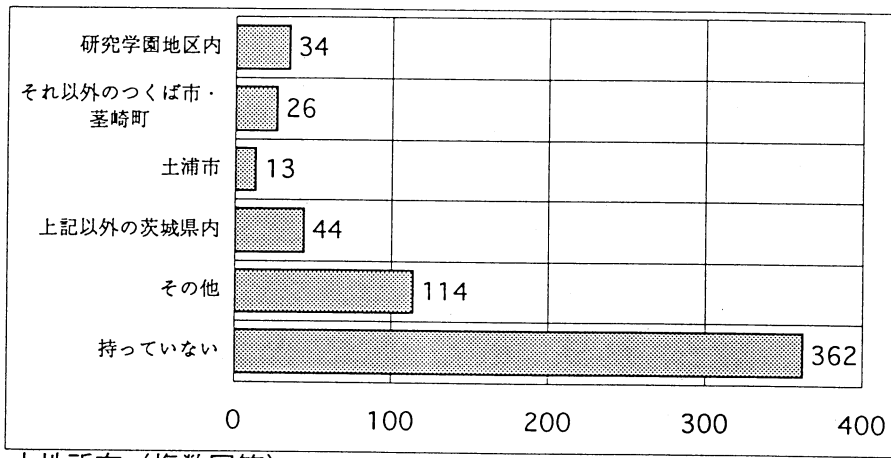
研究学園都市への転入理由を見る。全体的な傾向としては「職場・学校の都合」がもっとも多く、約70％を占める。また、民間高層住宅では「研究学園都市の将来性」が、周辺一般住宅では「定住するため」がそれぞれ20％を占めるのが特徴的である。



研究学園都市に転入した理由

② 土地所有

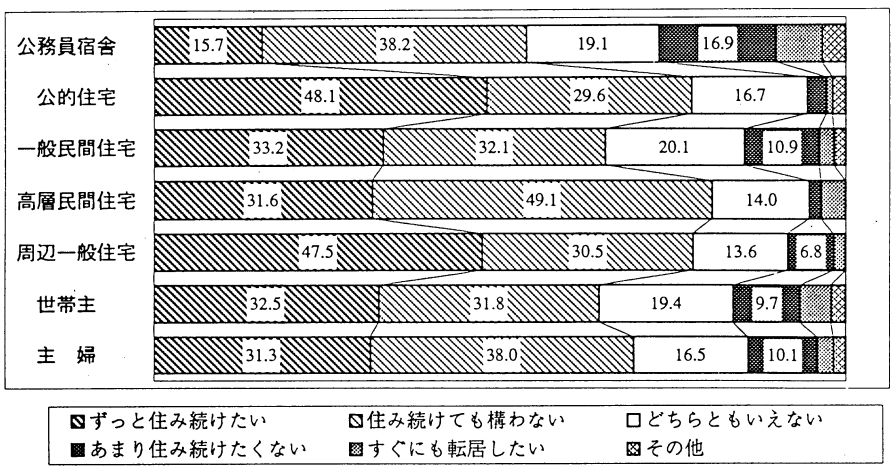
現在の住宅以外の土地の所有状況を見る。これによると、「持っていない」が61.6%（588人中362人）を占めるが、所有地の場所では「その他（茨城県外）」がもっとも多く、茨城県内、研究学園地区内と続く。



土地所有（複数回答）

③ 定住意向

研究学園都市への定住意向を見る。全体の傾向としては、「ずっと住み続けたい」「住み続けても構わない」の肯定派が約67％を占め、「あまり住み続けたくない」「すぐにも転居したい」を合わせた否定派は少数である。これは世帯主、主婦間でもあまり差が見られない。住宅形態別では、公的住宅と周辺一般住宅で「ずっと住み続けたい」(積極的定住意向) が約半数を占め、転勤の多い公務員の定住意向とは対照的である。

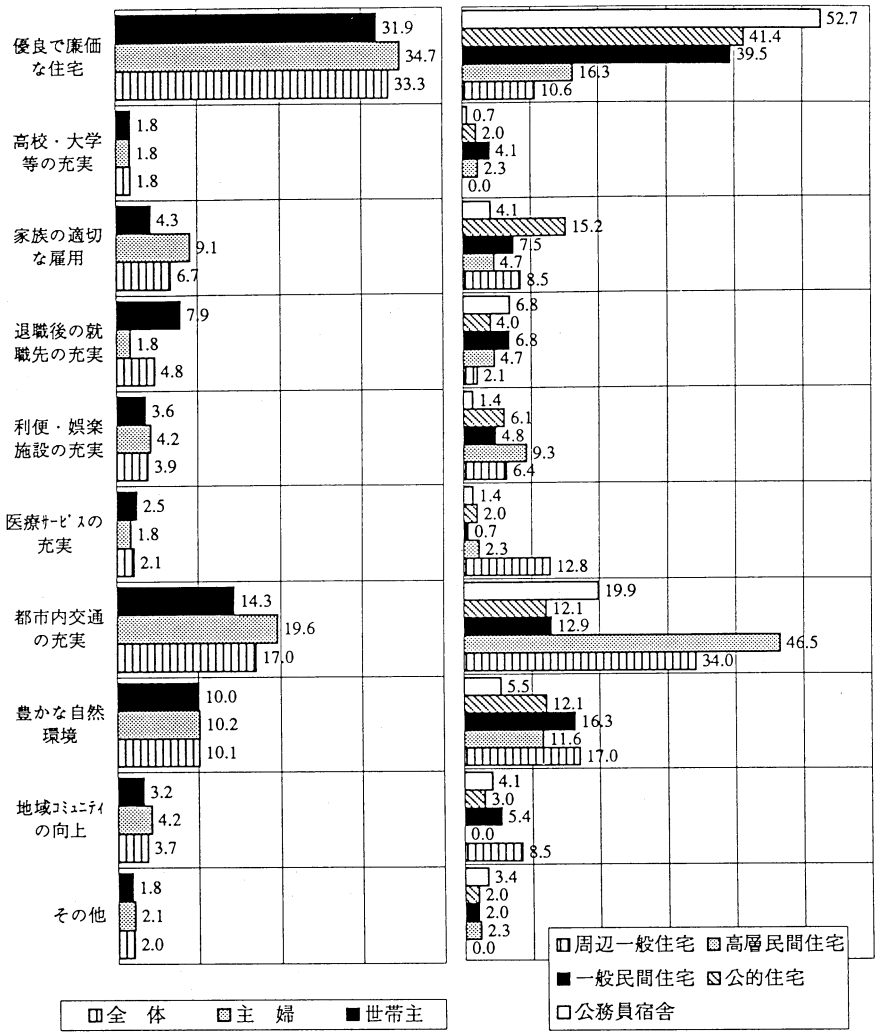


研究学園都市への定住意向

④定住条件

研究学園都市に定住するための条件を９項目提示し、順位をつけて２つ選択してもらい、それぞれの指摘率を見た。

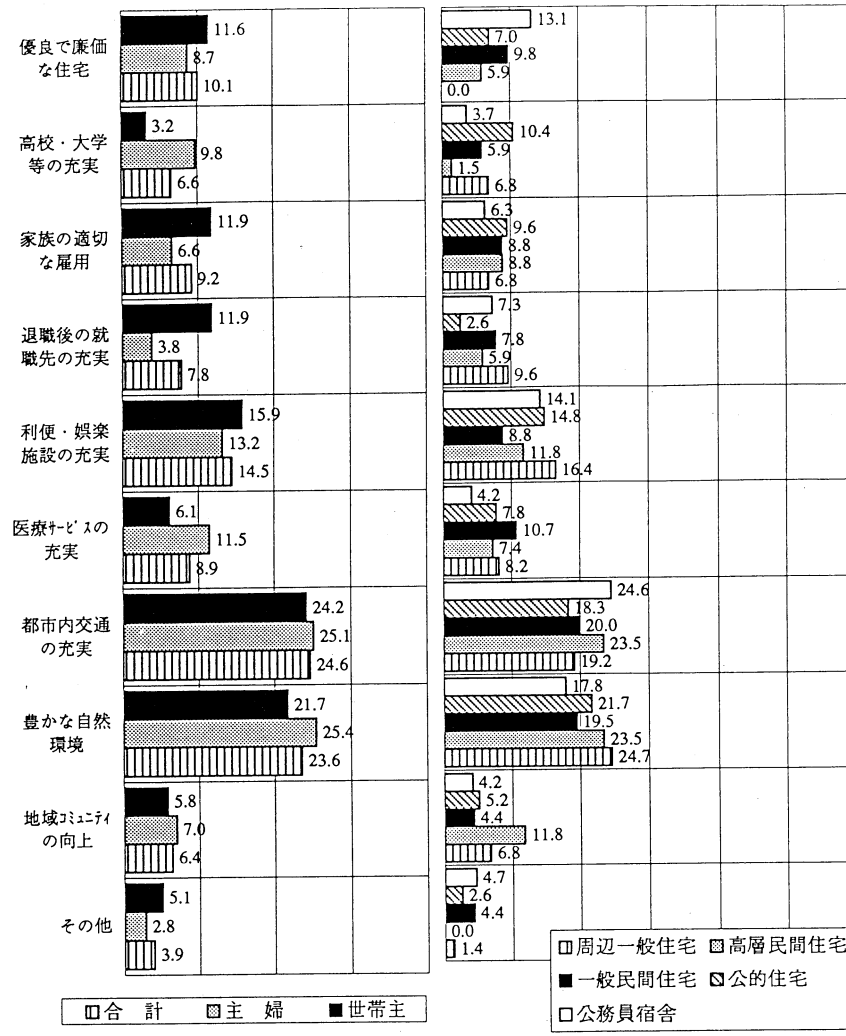
第１に指摘された項目では、全体的な傾向として、「優良で廉価な住宅の取得」がもっとも多く、約30％の回答者が指摘している。ついで、「都市内の交通機関の充実」、「豊かな自然環境の保全」が続く。世帯主、主婦間では、「退職後の就職先」で世帯主が、「家族の雇用」を主婦がそれぞれ多く指摘しているが、これらはまとめて「世帯主の退職後の就職先」を意味するものと考えられる。また、住宅形態別では公務員宿舎、公的住宅、一般民間住宅で「優良で廉価な住宅の取得」が多いのに対し、民間高層住宅、周辺一般住宅では「都市内の交通機関の充実」が高い指摘率を示している。



定住条件（第１に指摘された項目）その１、２（世帯主・主婦、住宅形態別）

（複数回答、指摘率＝指摘数／有効回答数×100）

第２に指摘された項目では、全体では「都市内の交通機関の充実」、「豊かな自然環境の保全」が高い。世帯主・主婦間の傾向としては、世帯主が「退職後の就職先」、「家族の雇用」で、主婦が「高校・大学等の充実」、「医療サービスの充実」でそれぞれ相対的に高い値を示している。住宅形態別では、公務員宿舎で都市内交通の充実と廉価な住宅の供給、公的住宅では高校・大学の充実、一般民間で医療サービスの充実、高層民間住宅で地域コミュニティーの充実、周辺一般住宅で利便・娯楽施設の充実が相対的に高く指摘された。



定住条件（第２に指摘された項目）その１、２（世帯主・主婦、住宅形態別）

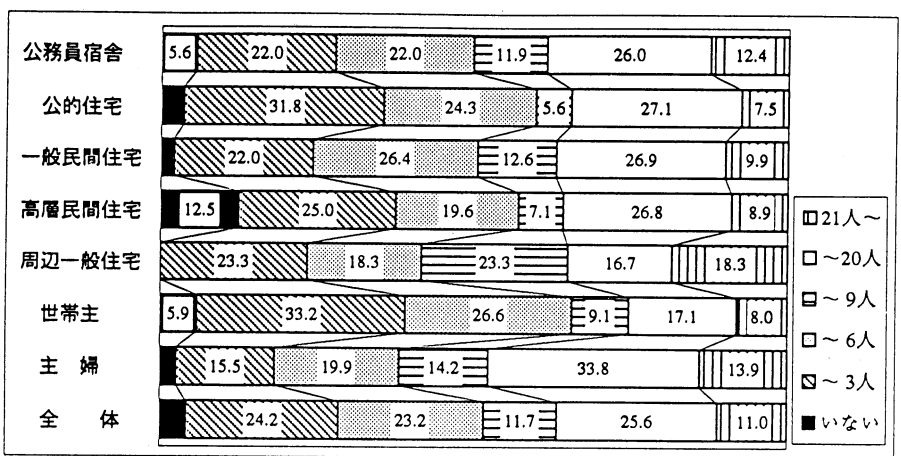
（複数回答、指摘率＝指摘数／有効回答数×100）

2—2. 生活実態

① 地域の人々との交流、交際

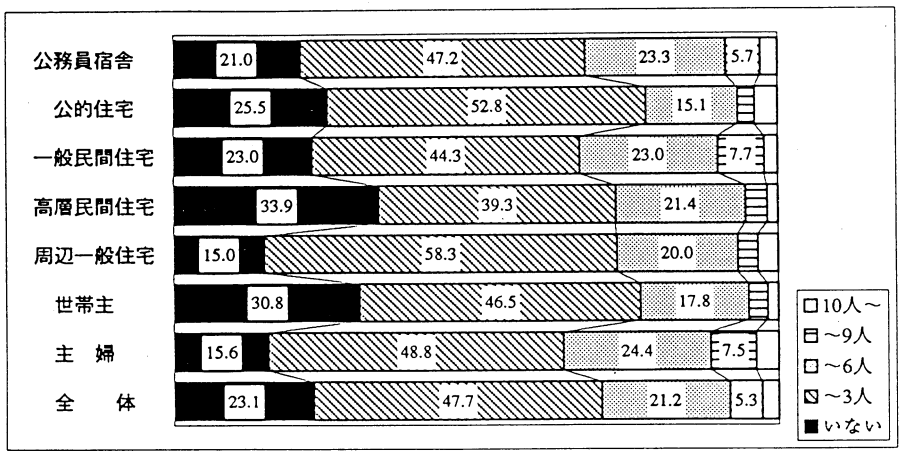
地域の人々との交流、交際について、「顔、名前を知っていて、会えば世間話をする程度の知人・友人」と「相互に自宅を訪問したり、親しく行き来している知人・友人」に分けて、それぞれの人数を聞いた。

「世間話程度」の知人・友人の人数は、全体的な傾向としては、1～3人、4～6人、10～20人がほぼ均等に分布している。また、世帯主・主婦間では世帯主の方が人数が少なく、地域での交流の範囲が狭いことを示してる。住宅形態別では周辺一般住宅では知人がいないという回答はなく、逆に21人以上が20%近くあるのに対し、民間高層住宅では知人がいない人が12.5%に上るなど、コミュニティー構造の違いを示している。



世間話程度の知人・友人の数

「親しく行き来している」知人・友人の人数は、全体では１～３人が約半数で、０人、４～６人と続く。また、世帯主・主婦間、住宅形態別の傾向は前項とほぼ同様である。



親しく行き来している知人・友人の数

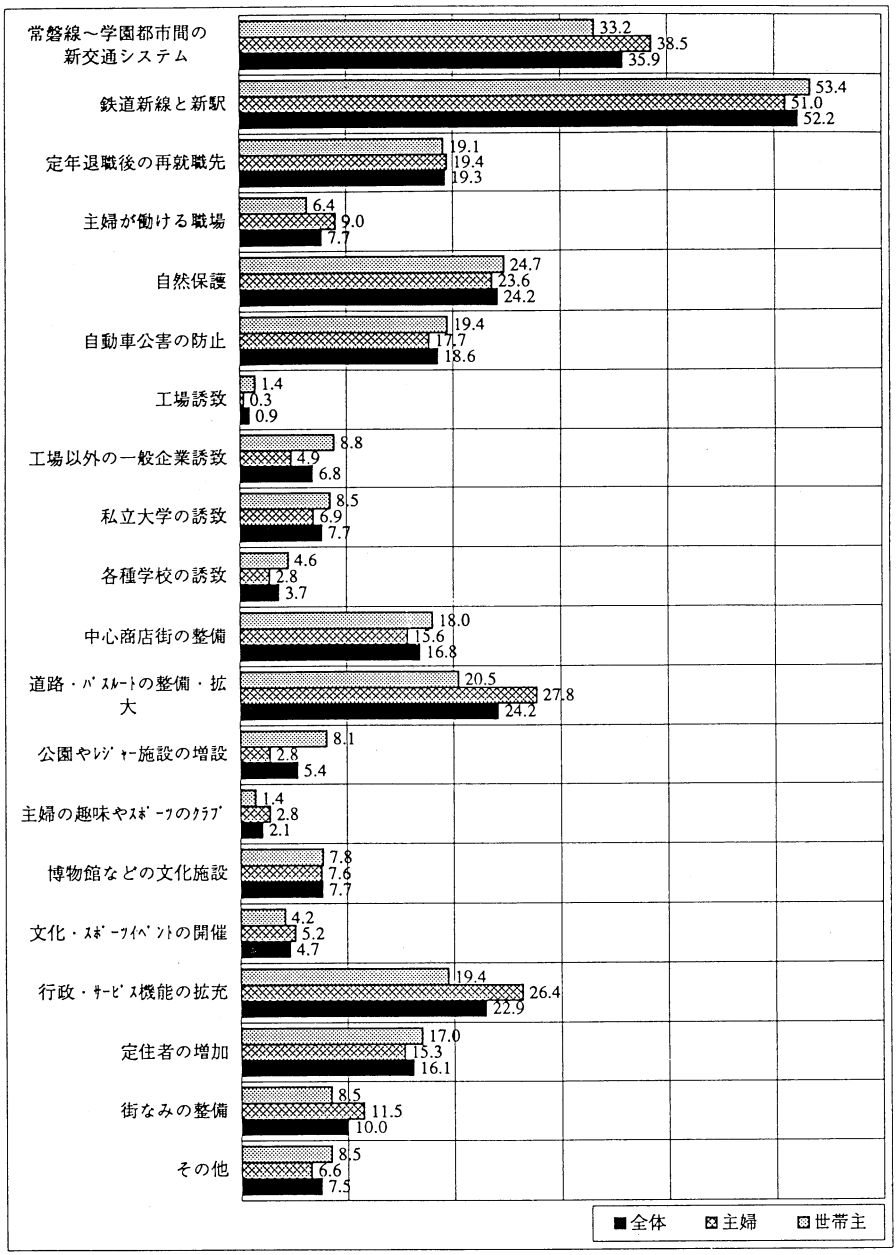
2—3.研究学園都市の将来像

① 今後の研究学園都市の発展のために重要な要素

筑波研究学園都市が抱えている課題を20提示し、今後さらに発展するために重要と思われる項目を3つ選んでもらい、その指摘率を見る。

全体の傾向としては、2000年の開業をめざしている鉄道新線（常磐新線）とその新駅がもっとも多く、2位の常磐線と連絡する新交通システムと合わせて都市外との交通機能の充実が強く期待されていることがわかる。また、自然保護、交通安全といった生活環境の改善に関する項目、行政機能・サービス機能の拡充、退職後の雇用、定住者の増加といった項目が多く指摘されている。また、各種施設の誘致、レジャー関係の施設の拡充についてはあまり重要視されていない。

世帯主と主婦間の特徴としては、世帯主が鉄道新線、一般企業の誘致、スポーツ、レジャー施設の増設でやや多く、主婦が常磐線と連絡する新交通システム、道路・バスルートの整備・拡大、行政機能・サービス機能の拡充といったより生活に密着した項目を相対的に多く指摘している。

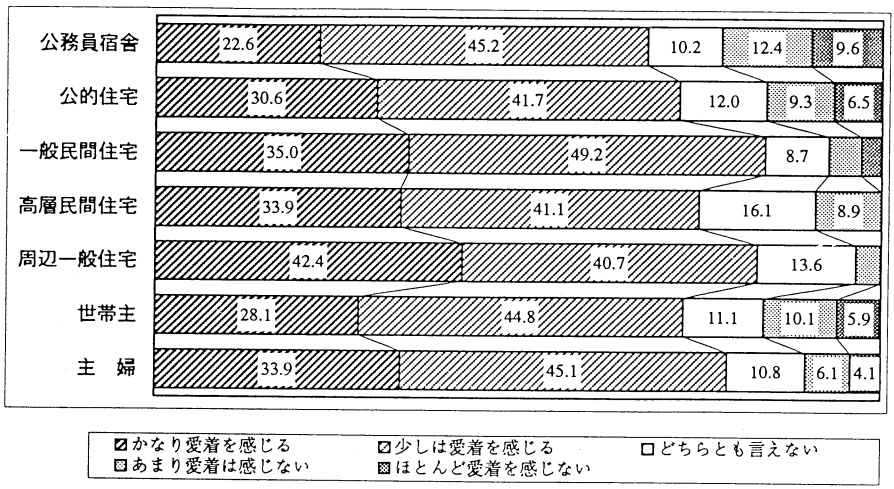


研究学園都市の今後の発展のために重要な要素（全体、世帯主、主婦）

（複数回答、指摘率＝指摘数／有効回答数×100）

② 現在住んでいる地域への愛着度（総合評価）

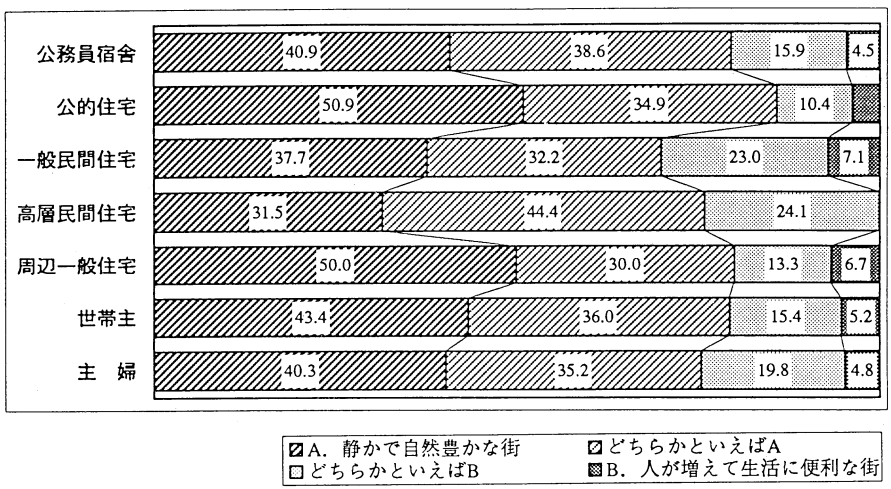
全体では75％以上が現在住んでいる地域に愛着を持っており、世帯主よりも主婦の方がよりこの傾向が強い。住宅形態別では、公務員宿舎で愛着度が低く、一般民間住宅、周辺一般住宅で比較的高い。



現在住んでいる地域への愛着度

③ 今後の街づくりの方向

今後の街づくりの望ましい方向性として、「A. 静かで豊かな自然環境のある街」「B. 人が増えて生活に便利な街」という相反する２つの方針を提示し、どちらを望むかを聞いた。その結果、全体では約77％が「静かで豊かな自然環境のある街」を選択している。世帯主・主婦間では世帯主の方がややこの傾向が強く、住宅形態別では公的住宅では地区間では「静かで豊かな自然環境のある街」の支持が多く、一般民間住宅では少ない。



今後の街づくりの方向

座談会
これからのつくば
――長ぐつ時代の市民が語る――
21世紀つくばへの提言　シリーズ4

TUTC Library — **18**

発行日　平成8年10月
発行人　坏　叔男
発行所　財団法人　つくば都市交通センター
〒305　茨城県つくば市吾妻1丁目5-1
☎0298(55)7211　FAX0298(56)0311

非売品

ＴＵＴＣライブラリー　一覧

1．（シンポジウム）つくばの交通問題を考える

2．（レポート）つくばのバス輸送のあり方

3．（シンポジウム）つくばのバス交通を考える

4．（レポート）つくばセンターの駐車場利用調査

5．（レポート）つくばの交通に関するアンケート

6．（シンポジウム）つくばの交通をどうするか

7．（座談会）地方都市と交通――つくばの問題を中心に――

8．（市民レポート）自転車のあるつくばの楽しい生活

9．（座談会）筑波研究・学園都市の草創期を語る

10．（座談会）つくばのショッピングセンターのあり方
――21世紀の都心形成の展望

11．（座談会）つくば南１駐車場をめぐって

12．（レポート）つくばのバス輸送のあり方2

13．（座談会）常磐新線と土地問題――今なぜ大規模宅地開発か

14．新しいつくばの歴史　　中学生社会科用副読本

15．（座談会）常磐新線と地域開発――つくばを中心に

16．（座談会）新しいつくばと研究者

17．（座談会、レポート）つくばの交通事故

財団法人 つくば都市交通センター　〒305 茨城県つくば市吾妻1丁目5−1　電話・0298−55−7211［代表］